

「三条教則」關係資料（十六）

本号は

○『明教事実』上下 平田長子・久保惠隣・久保季茲（明治七年十月）
の一点を収める。

『明教事実』 平田長子・久保惠隣・久保季茲（明治七年十月）

本書は版本、上下二冊で、いずれも和製袋綴である。上巻は表紙題簽に「明教事実 上」とあり、次いで平田長子・久保惠隣兩名の連記による「例言」が一丁あり、ついで本文三十六丁が続き、三十七丁より成る。同様に、下巻も表紙題簽に「明教事実 下」とあり、以下、本文二十八丁が続き、巻末に「明教事実ヲ刻本トスル由縁」と題して、本書を上梓した事情理由について、編者の一人久保季茲すまじけが述べた箇所（一丁）があり、そのあと、「官許 明治七年十月 杉乃舎藏版 製本所 京都菅廼舎池村氏」とあつて、二十九丁より成り、上下二冊合計六十六丁である。

また著述者については、平田長子・久保惠隣二名の共編となつてゐるが、惠隣のりちかは季茲の子で安政五年（一八五八）の生れ、よつて本書の成立した明治七年（一八七四）は十六歳であつた。十六歳で編者の一人という可能性もなくはないが、いかにも若い。末尾で父の季茲（当時四十五歳）が明確に版行の事情を述べてゐるので、共編として惠隣の名も加えたとも考えられるが、仔細は今後の課題としなければならぬだろう。そして、季茲は、梅津大講義の勧めもあつて明治七年九月に本書を上梓した、と末尾で版行の事情を述べていて、翌十月に官許を受け、自身の杉乃舎藏版としたのである。また、本書はこの翌月の明治七年十一月にも「梅津氏藏板」として「東京蠣殻町二丁目十一番地 建本堂」より版行（國學院大學「河野省三博士記念文庫」所蔵本は建本堂発行のものである）されている。なお、建本堂のものは上巻は三十丁（「例言」一丁・「本文」三十丁）、下巻は本文二十二丁、計六十二丁で、もちろん内容も同様であるが、巻末の「明教事実ヲ刻本トスル由縁」（二丁）は付していない。

国学者、久保季茲は天保元年（一八三〇）五月十二日、江戸本郷に生れ、鎮吉、のち玄貞、杉乃舎、静園、杉庵居士とも称した。最初は漢学と医学を学び、古事記伝を読むにいたつて国典研究に志し、鶴峯戊申に学んでゐる。のち

幕府医官となり、攘夷を唱え、大政奉還以後は入間郡新井に隠棲するが、明治元年十二月神祇官書記官となり、大学大助教、宣教中博士、教部省御用掛となり、大神神社宮司となつて正七位に叙された。また、晩年には皇典講究所設立後、文学部教授となつて教育に力を尽し、明治十九年（一八八六）三月五日五十七歳で没した。法名は道隈豊開別大人、東京谷中墓地に葬られた。著述は『古語拾遺講義』『万葉山常百首解』『神庫の梯立』『野芹』『洋教弁略』など多数存する。

また久保季茲の子、惠隣は安政五年（一八五八）江戸麹町に生れ、明治六年教尊職試補、翌七年に少講義、九年権講義となり、十年神道事務局講師、十四年大講義、十七年皇典講究所文学部助教、二十三年國學院講師兼幹事、二十七年東京府神職取締所長、皇典講究所試験委員、三十三年日枝神社宮司となり、大正二年神社奉祀調査会兼明治神宮造管局囑託となり、晩年東京府神職会長になつている。従五位、大正八年（一九一九）没。著書に『清園諄辭集』などがある。

次に、本書の内容体裁については、上巻が「敬神」項目について九丁、「愛国」項目が七丁、「天理」項目七丁、「人道之上」十六丁（このうち、「君道」項目五丁、「臣道」項目十二丁）、下巻は「人道之下」二十丁（このうち、「父子之道」項目七丁、「夫婦之道」項目八丁、「朋友之道」項目六丁）、「皇上奉戴朝旨遵守」条項が九丁となつている。そして、内容は「例言」にみられるとおり、三条教則の一々の文言の衍義というよりも、三条教則の大意や主旨に合致した日本の歴史上の事実を数多くの国典類より抜き出して示したものとなつている。さらに、その国典類も『日本書紀』や『古事記』『六国史』『三代実録』『出雲国風土記』だけでなく、『古今著聞集』『今昔物語』『古今集』『伊勢物語』『宇治拾遺集』『十訓抄』『大鏡』『今鏡』『古事談』『吾妻鏡』『太平記』『西山遺事』など、いわゆる説話にまで広範囲にわたつているのが、事実という点で多々問題はあがあるが、同時に、本書の一つの特色となつている。したがって、厳密にみれば、衍義書とは言えないが、数多くの例話や実歴談を掲出したという衍義書関連としての特徴

を有した意味において、本書を採用した。

なお、翻刻掲載については、筆者架蔵本（元々、文学博士村尾次郎氏の架蔵するところであったが、先年同氏より譲り受けたものである）に依った。

（三宅）

凡 例

凡例については、前号にしたがった。

『明教事実』平田長子・久保憲隣・久保季茲

(明治七年十月)

明教事実

例言

- 一 此書ハ三条教憲ニモトヅキテ、其大意ヲ略述シ、且ツ其趣旨ニ叶ヘル事実ドモヲ古今ノ書ヨリヌキ出テ、幼童ノ読ニ供ス。ソハ世ニ童蒙教草ノ類アリテ、外人ノ事ハ知ラルレド、皇国古人ノ善行美事ヲ知ルベキ簡便ナル書ノナキガウレタケレバナリ。
- 一 幼童ノ見安キヲ專トスルヲ以テ、文辭ノ拙キハ更ナリ。簡略ニ過テサトリ難キ事モアルベシ、見ン人勿答メソ。

- 一 事実ハ各出所ヲ注セリ。コレ虚談ナラヌヲ証シ、且本書ヲ檢尋セン便トスルナリ。サハイヘド、オノレ浅学短才ニシテ、広ク諸書ニ渉ルコト能ハズ。孫引セルモ少カラネバ、誤マレル事多カルベシ。ソハ看者ノ是正ヲ乞フニナン。

明教事実 上卷

敬神

神明ノ恩徳ノ厚キコト、誰人モ知ル所ナレバ、其神ヲ敬スベキ事、亦誰モ知ル所ナガラ、中ニハ夏虫ノ小智ヲ以テ、或ハ疑フ者無キニシモアラス。抑今此現在ノ物ヲ以テ案ズルニ、日月星辰ノ空ニカ、リテ旋転シ、人獸鳥虫ノ地ヲ走りテ生活スル、最奇怪ナラズヤ。是神明ノ功德ニ依ラズシテ何ゾ。已ニ漢籍ニモ、天非^ス自^ラ天^ニ有^リ成^スレ^ル天^者地非^ス自^ラ地^ニ有^リ成^スレ^ル地^者ナドイヘル如ク、其天地ヲ成ス者ハ、即チ神明ナリ。古事記序ニモ、乾坤初分^レ參神作^シ造化之首^ト陰陽斯^ニ開^ケテ^テ靈^ヲ為^リ群品之祖^トイヒ、顯宗天皇ノ御代、月ノ神ノ託宣ニモ、高皇產靈、有^テ預^メ鑄^ル造^ル天地^ノ之功^ト有^ルニテ、天地日月、風火金水土、草木五穀等、悉皆神等ノ為シ給フコトナルヲ知ベシ。人ハ天地ノ間ニ生レ、其神等ノ恩徳ヲ蒙ル、豈敬拜セザランヤ。殊ニ我国ハ天地ノ初ノ時、伊邪那岐、伊邪那美命ノ生成シ給ヘル神国ニシテ、人民ハ其神等ノ生

ナシ給ヘル神孫ナリ。然レバ、此神等ハ己ガ身ノ先祖、己ガ国ノ本主ナリ。故ニ神ハ親ニシテ、人ハ子ナレバ、其愛シ給フ事モ、亦一トホリナラズ、厚キコトナレドモ、其子ナル人ノ其親タル神ヲ輕ジ、謗ルコトアルニ至テハ、止ムコトヲ得給ハズ、罰ヲモアテ給フ也。誰カハ親トシテ、子ヲ惡ムモノアラン。神ハ人ノ繁栄ヲ喜ビ給フナレバ、罰シ給フヲ、争カ本意トハ思ヒ給ハム。サレバ人トシテ世ニ在テ、カ、ル神恩ヲ蒙レバ、争カハ其神等ヲ尊崇セザルコトヲ得ン。故ニ心ニ眞実ヲツクシ、行忠誠ヲ致シテ神明ニ奉仕シ、恩頼ニ報謝スベシ。然レバ、歷朝敬神ノ意ヲ詔シ給ヒシ事、イト多シ。其一ニライハツ、天平宝字二年ノ詔ニ天^ツ日嗣高御座ノ業ハ天^ニ坐神^{クニ}地坐神ノ相ウツナヒ奉リ、相扶奉ル事ニ依テシ、此御座ニハ平ケク安ラケク、天ノ下ハ知ラスル物ナリ云々ト見エ、コレハ孝謙天皇ノ御代ナレドモ、古クヨリ用ヒ來レルガ、オホケレバ、コレモ其類ナルベシ。宝龜七年ノ勅ニ、祭祀^ニ神祇^ヲ國之大典、若シ不^レ誠敬^ハ何以致^セ福^ヲ云々、又、延曆十八年ノ勅ニ、祭祀之事^ハ在^リ德^ト、与^テ敬^ト、心不^レ致^ラ敬^ヲ神寧^シ享^シ之^ヲ云々ナドアリ。又、禁秘御抄ニ、禁中作法^ハ先^ツ神事、後^ニ他事且暮敬神之^レ愼慮無^ク懈怠^ニ云々、

後宇多天皇ノ御歌ニ、「天ツ神國ツ社ヲ齋ヒテゾ我葦原、國ハ治マル」、此外、猶アマタアレド、煩ハシケレバ省キヌ。爰ニ神明ヲ敬シテ靈驗アリシ話ヲ、一ツニツ左ニ示サン。

神武天皇東征シ給ヘル時、熊野山ニ惡神有テ毒氣ヲ吐ケレバ、皇師皆病臥ヌ。爰ニ熊野ノ、高倉下ト云人ノ夢ニ、天照大御、神武甕槌、神ニ勅シ給ク、葦原、中^ツ國^{サツガ}喧響^シクシテ、我皇子等惱ミ給ヘリ。汝往テ征スベシト詔ヘバ、武甕槌、神答テ、我往カズトモ我國平シ劍ヲ下スベシトテ、高倉下ニ向テ、吾劍名ハ^{フツミケノヤ}部靈ヲ汝ノ庫内ニ置クベシ、汝取テ天神ノ御子ニ奉レト宣フ。仍テ明旦庫ヲ見レバ、果シテ劍有ケレバ、取テ天皇ヘ奉ル。是ニ依テ惡神等皆退治セラレタリ。其レヨリ大和ヘ入ラントシ給フニ、道路險阻ニシテ行キ難シ。コ、ニ天皇ノ御夢ニ、天照大御神見エ給ヒテ、今八咫鳥ヲ遣シテ道引トセント詔ヘリ。果シテ大ナル鳥有テ、空ヨリ飛下リシカハ、其鳥ノ向フ所ヲ尋テ追ヒ、至リテ遂ニ大和ノ宇陀ニ出タリ。日本紀

又、長髓彦ト戰給ヒシニ、賊軍強クシテ勝ツコト能ハズ。

爰ニ金色ナル鵝アリ。天皇ノ御弓ノ弭ニ留マレリ。其光電ノ如シ。賊軍コレヲ見テ眩キ迷ヒ、戦フ事ヲ得ザリキ。故ニソコヲ鵝ノ邑トイヒシヲ、後ニハ鳥見トイヘリ。同上

景行天皇ノ御代、筑紫へ行幸アリケルニ、肥後ノ国ノ葦北ナル小嶋ニテ、山部阿弭古ノ祖小左ト云者ヲシテ水ヲ求給ヘドモ水ナカリシ。故〔二〕小左神祇ニ祈リシカハ、忽チ岸傍ヨリ寒泉湧出タリ。依テソコヲ水嶋ト名ツケタリ。同上

仲哀天皇ノ八年、神託有テ新羅国ヲ討給ヘト教ヘ給フ。

然ルニ、明年二月天皇筑紫ノ橿日宮ニ崩シ給フ。皇后息長足姫尊^{神功皇后}傷ミ給ヒテ、神ノ教ノマ、ニ新羅国ヲ伐ント思ホシテ、猶神ノ御言ヲ請給ヒ、乃其御教ノ如クニ祭リ給フ。四月、又天地ノ神ヲ祭り、神田ヲ定メテ、佃ラシメ、饑河ノ水ヲ其神田ニ引セントシテ、溝ヲ堀ラシメ給フニ、迹^{トモ}驚^{ワロキ}岡^郡那^珂ト云所ニ至リテ大石塞ガリテ堀難シ。皇后武内宿禰ヲ召テ、劍鏡ヲ捧奉リテ神等ニ祈リ給ヒシカハ、乃雷電霹靂シテ其石ヲ打サキテ水ヲ通サシメ給ヘリ。故〔二〕其溝ヲ号シテ裂田溝ト名ツケタリ。同上

天武天皇未ダ御位ニ即キ給ハズ、大友天皇ト御合戦アリシ程野上ノ行宮ニ座坐ケルニ、雷雨甚シカリケレバ、天神地祇朕ヲ助ケ給ハ、雷雨息ント祈リ給フニ、忽止ケルトゾ。同上

同天皇ノ御代、二年七月十三日、語、臣猪麻呂ガ女子出雲ノ国意宇郡安来郷ノ北海ナル毘売塔ニ遊ビタリシニ、タマノ為ニ害セラレテ帰ラズ。其時父猪麻呂大ニ憂ヒ、昼夜其女子ノ害セラレシ処ヲ避ラズ、数日ヲ経タリ。然後ニ慷慨ノ志ヲ興シテ矢ノ鋭ヲ撰ビ祈訴テ曰ク、天神地祇並当国ニ鎮マリマシ坐三百九十九社及海若神等、大神ノ和魂ハ静マリ坐テ、荒魂ハ皆悉ク猪麻呂ガ乞ヒノム所ニ依リ給ヘ良ニ神靈オハシ坐バ、吾傷メル事ヲ助ケ給ヘ、此ヲ以テ神ノ神タルヲ知ラント云ヘバ、暫時アリテ百余ノ鰐、静ニ一ツノ鰐ヲ困キテ来テ、進ミモセズ、退キモセズ、其時鋒ヲ拳テ一ツノ鰐ヲ刺殺セバ百余ノ鰐皆散ズ。乃チ割テ是ヲ見レバ女子ノ一脛アリ。仍鰐ヲ割テ串ニ掛テ、路ノ辺ニ立タリ。出雲風土記

孝謙天皇僧道鏡ヲ寵愛アリ。此時、太宰主神習宜阿蘇麻呂ト云者八幡ノ神教ト矯リテ、道鏡ヲ以テ天位ニ即カシ

メバ天下太平ナラント奏セリ。天皇清麻呂ニ詔シテ宇佐宮ニ詣テ、神教ヲ聴カシメ給フ。清麻呂神宮ニ詣テ、折テ曰ク、今大神ノ教ヘ給フ所ハ国家ノ大事ナリ、願クハ神異ヲ示シ給ヘト云バ、大神即形ヲ現ジ給フ。其長三丈計リニシテ、色満月ノ如シ。清麻呂恐レテ仰見ルコト能ハズ。爰ニ於テ大神託宜シ給ハク、我国ハ天地ノ初ヨリ君臣定マレリ、天日嗣ハ必皇緒ヲ立ヨ、道鏡無道ニシテ神器ヲ觴フ、早ク掃除スベシ、道鏡ノ怒ヲ恐ル、コト勿レ、吾必汝ヲ濟ハント詔フ。清麻呂婦リテ奏スルコト神教ノ如シ。道鏡大ニ怒リ、清麻呂ノ官位ヲ解キ、姓名ヲ別部穢麻呂ト改メ、脚筋ヲ断テ大隅^ク国ニ流ス。道鏡猶怒不堪ヘズ、之ヲ途中ニ殺サントシテ人ヲシテ追ヒ殺サシム。時シモ雷雨晦冥ニシテ刑ヲ行フコト能ハズ。遂ニ免カル、コトヲ得タリ。其後、光仁天皇ノ時ニ至リ、勅シテ京ニ入ラシム。然ルニ脚痿テ立コト能ハザル故、駕輿シテ発シ、宇佐宮ヲ拜スルニ、始メテ起歩スルコトヲ得、遂ニ馬ヲ馳セテ還レリ。統日本紀
日本後紀

仁安三年四月廿一日ハ吉田祭ナリ。伊予守信隆朝臣ハ其氏人ナルニ、神事ヲモセズシテ仁王講ヲ行ヒシガ、御明

ノ火、障子ニ移リテ其家焼タリ。隣ナル民部卿光忠卿ノ家ハ神事ニテアリシカハ、火移ラザリケリ。古今著聞集

後醍醐天皇ノ延元元年六月、足利高氏陽^{イハカリタツ}降リテ、車駕ヲ京師ニ還サンコトヲ請奉リシカハ、遂ニ勅許アリテ還幸座坐シテ、花山院ノ故宮ニ押籠奉レリ。十二月天皇花山院ヲ窃ニ出御アリテ大和ノ方ヘ赴カセ給フ。夜中甚暗クシテ咫尺モ分タズ、稻荷社ノ前ニ至リ給フ時ニ、天皇拜ミ給ヒテ、「ヌバ玉ノ暗キヤミ路ニ迷フナリ我ニカサナン三ツノ燈火」、ト詠ジ給ヘバ、社ノ上ヨリ赤雲現レテ道ヲ照セリ。依^レ之テ夜ノ明ル頃、大和国賀^カ名^ナ生^ナトイフ処ヘ着セ給ヘリ。芳野拾遺

文永ノ神軍、弘安ノ神風ノ事ハ世ノ人ノ知ル所ナリ。其大凡ハ愛國ノ所ニ云フベシ。

又、延喜六年、隱岐国ニテ坤ノ方ヨリ大風吹キ、船ノ帆柱等ノ木ドモ海岸ニ漂着セリ。此国ニ座ス天建金草神社託宣ニ、新羅ノ賊船數艘襲来セル故、ワレ大風ヲ起シテ沈没セシメタリト詔ヘリ。日本紀略

又、応永廿六年六月、蒙古高麗賊船五百余艘対馬ニ来テ合戦アリ。吾軍敗レシ時、イヅクトモナク大船四艘出来

光院
御紀

り、大将ハ女人ニテ賊兵三百人ヲ手捕ニシテ海中ニ投入レ、其上風雷雨鳴シテ、兵船悉ク退キタリシ事アリ。崇後

袈裟ニ裹ミテ伊勢国マデ逃去ケルニ、神劍自ラ脱ケテ本社ニ還リ給フ。道行又盜テ撰津国ニ逃至リ、難波津ヨリ纒ヲ解キ、国ニ帰ラント欲スルニ、海中ニテ度ヲ失ヒ、又、難波津ニ漂着セシカバ、道行大ニ恐れ、神劍ヲ棄ン

此外ニモ、カ、ル類多カレド、大凡ニシテ差置キツ。
伊勢国ニテアル武家ノ僕、主人ニ暇乞ハズシテ大神宮へ参詣シタリシカバ、主人大ニ怒リ、其帰ルヲ待テ切殺シ

トスルニ身ヲ離レ給ハズ、セン方ナク其由ヲ申出シカハ、斬刑ニ処セラレタリ。熱田縁起

即葬タリ。其後僕カヘリ来リシヲ見テ幽霊ナラント驚ケバ、只今参宮シテ帰リタル也ト云故、怪ミテ埋ミタル死骸ヲ見レバ、大神宮ノ大麻ナリ。大神宮
神異記 此ハ主人ノ許シ

太宰大式清原朝臣峰成ハ、太宰府ノ倉屋大破ニヨリテ神社ノ木ヲ伐テ修復セントス。人皆崇リアランコトヲ恐レテ止レドモ聞ザリシカ、幾程ナク卒セリ。是全ク神罰ナリ。三代
実録 コノ類ヲ見テ、神ノ御怒ノ畏キコトヲ知りテ

ハアマリナレバ、神明ノ助ケ給ヒシ也。

慎シムベシ。

神ハ如^レ此キ靈験アル者ナレバ、恐れ敬フ可キコトナリ。

凡テ心ヲ正シ行ヲ慎ミテ、神ノ喜ビ給フコトヲ行ヒテ加

愛国

護ヲ祈ラバ、神明ノ感応、亦響ノ声ニ応ズルガ如クナラ

各国ノ人何^レモ其国ヲ愛セザル者ナシ。況テ我皇国ハ神明ノ本域ニシテ、天地開闢ノ始ヨリ、神祇ミナ此国ニ出

行ヒ、人道ヲ務ムルニアリ。爰ニ又、神罰ヲ受シ物語ヲ

現坐マシ、殊ニ天照大御神ソノ御孫ヲ以テ此国ノ君ト定メ給ヒ天降シ給ヘル、コレ我天皇ノ御大祖ニ坐マシ、皇

一ツニツ云ン。

統連綿トシテ絶ユルコトナク、偶マ逆臣有テモ速ニ滅亡

天智天皇ノ七年、新羅ノ沙門道行、尾張国愛智郡ニ鎮座ス熱田大神ノ神体草薙ノ神劍ヲ盜ミ、本国ニ移サントシ、

シ、人民ハ祖先ヨリ皇祖ノ恩沢ニ浴シ、後世万々年ノ末

マデモ、天地ノ有ラン限り、朝廷ノ御徳化ヲ蒙ルコトナレバ、愛國ノ念モ一通ニテハ叶フベカラズ。抑大地ハ渾円ニシテ、上下ナキニ似タレドモ、自然其別ナキニ非ズ。世界ハ東方亜細亞ヨリ開ケシ事ハ西洋ニモイヒ、漢ニモ万物東方ニ始ルト云ヘリ。サレバ東方ハ上ナリ、始ナリ。西方ハ下ナリ、末ナリ。皇國ハ万国ノ東ニアリ。古ヨリ日本ト称スルコト、誠ニ当レリ。此國号古クハ聞エズト云人有レドモ、推古天皇ノ隋ヘ遣シ、勅書ニ、日出処ノ天皇ト書給ヒ、万葉ニモ日本ノヤマト、ヨメリ。漢籍ニモ軒轅本紀述異記等ニ日本ノ名見ユ。唐書ニ倭國其名ヲ惡テ日本ト改ムト記セシハ誤ナリ。然レバ皇國ハ万国ノ最初タルコト明白ト云ベシ。亜米利加ナドヲ東方ト思フモ有ンカ。コレハ歐羅巴人ノ檢出セル所ニシテ、西ノ極ナリト知ルベシ。

西洋人ノ説ニ、北極三十度ヨリ四十度ノ間ニ当ル國ハ、世界中ノ美地トス。日本ハ其処ニ位シ、寒暖中ヲ得タリ。又、其土地開放シテ嶋嶼ヲ合セタル如クナレバ、産物多ク、諸品具足セリ。且國ニ山岳多ク、人民身ヲ勞シテ耕作スル、故ニ身体壯ニ精神強シ。凡テ人氣勇武、刀劍銳

利、他ニ比類ナシト云ヘリ。コレ國人自讚ノ誇言ニ非ズ、公平至当、尤モ信ヲ取ルニ足レリ。

又、皇國ノ地甚大ナラズトイヘドモ、西洋各国ヨリ支那魯西亞ノ大国ニ並テ帝爵ニ數ルハ、自ラ帝國タル実有レバ也。是亦外國ノイフ所ヲ以テ、皇國ノ貴キヲ知ルベシ。攘夷ノ義、膺徴ノ典、漢土ノ古ニイフ所ナレドモ、後世遂ニ元清ノ侵奪ヲ免ガレズ、皇國ハ昔ヨリ外邦ノ凌侮ヲ受タルナシ。文永十一年十月、蒙古ヨリ軍船渡リ、対馬ヲ攻トリ、筑前マデ押寄、吾兵利ヲ失ヒシ所ニ、同月廿日夜、イヅクトモナク兵船ニ艘出来テ賊兵ヲ追退ケタリ。又、弘安四年蒙古軍艦四千艘、軍兵十余万人寄来テ対馬壹岐ヲ侵セシ時、閏七月一日大風吹起リテ軍艦ヲ覆シ、十萬ノ軍兵只三人ノミ帰ルコトヲ得タリ。コヲ神風ト称シテ名高キ事也。此蒙古ノ王、忽必烈クハフイカシ及ビ其先主窩活台ウフクタイ度々ノ合戦ニ天助ヲ得テ危難ヲ逃レ、或ハ大勝利ヲ得シ事アリ。然ルニ皇國ヲ攻シ時ハ、カクノ如ク大敗シタル。國体ノ相違雲泥ノ如シ。

國ヲ愛スルハ即チ身ヲ愛スル也。何トナレバ、國ナクバ身モ立ベカラズ。吾國富ミ、兵強ケレバ吾身安樂ナリ。

且食フ所ノ食、着ル所ノ衣、住ム所ノ家、イヅレカ国恩ニヨラザラン。然ルヲ己ガ身ノ利欲ノ為ニ国恩ヲ忘ル、ハ、愚昧ノ極トイフベシ。

愛國ハ先^ツ国体ヲ弁ヘテ、コレヲ損セザランコトヲ思フベク、国体ノ貴キ事ハ右ニ述タルガ如シ。猶国体ヲ汚サズ、国益ヲ為シタル話、一二ヲ左ニ示サン。

欽明天皇ノ御代、調吉士伊企儺^{ツギノキシイキナ}トイフ人、新羅ニ捕ハレシカ、彼軍士等日本ノ方ヘ尻ヲ向シメテ日本ノ將吾尻ヲ食ヘト云ベシト責シヲ、伊企儺大声ニ新羅ノ王我尻ヲ食ヘト呼ハリテ殺サレタリ。日本紀コレハ無謀ニ似タレドモ、聊モ敵ニ屈セズ、死ヲ懼レズ、勇猛ノ心、国ヲ汚サズト云ベシ。

齊明天皇ノ御代、大伴博麻^{ハツマ}ト云人、新羅ニテ唐兵ニ捕ハレ、唐國ニ渡リシガ、同時ニ捕ハレシ土師富杼、氷連老筑紫君薩夜麻、弓削連元実等ニ語テ云ク、吾等帰朝シテ唐人ノ謀ヲ奏セント思ヘドモ、衣糧無レバ如何トモスベカラズ、我今身ヲ売テ衣食ニ充ント云。富杼等其議ニ從ヒ、天智天皇ノ御代ニ帰朝セリ。其後統統天皇ノ四年ニ博麻モ帰レリ。依テ朝廷ヨリ汝独淹^ニ滞他界^ニ於^レ今三十

年矣、朕嘉^シ厥^レ尊^ニ朝愛^ニ国^ヲ売^ル田^ノ贖^ヲ詔アリテ、務大肆ノ位、并ニ絶綿布、稻水田等ヲ賜ヒ、三族ノ課役ヲ免サレタリ。同上

四方ニ使シテ、君命ヲ辱メザルヲ土ト云ベシトイヘリ。孝徳天皇ノ御代、遣唐使高向大史玄理等、唐ニ往ケル時、東宮監門郭文举日本ノ地理、并ニ国初ノ神名ヲ問ヘルニ、問ニ随テ答ヘタリ。同上今ノ世、神名ダニモ知ラヌ者モアリ、外国人ニ問レタル時、不知ト云ハ、豈^ニ国辱ナラザランヤ。

又、齊明天皇ノ御代、坂合部石布等、唐ニ至リテ唐帝ニ見ユ。唐帝問テ、日本天皇平安ナリヤ否ト云ニ、天地ト徳ヲ合シ、自ラ平安ヲ得タリト答フ。其外問答數十、言響ノ声ニ応ズルガ如クナリシトゾ。同上

右等ハ官員士族ノ上ナレドモ、農工商ト云トモ、各々國家ノ御為ニ益トナル所業アルハ、皆愛國ノ忠誠也。今日外国交際、追日隆ニナル御代ナレバ、別テ心得アルベキ也。崇峻天皇ノ御代、商^{アキノリ}長^ノ首^ノノ祖久比ト云人、吳國ニ渡リ、其國ノ權^{ハク}ヲ得テ持帰り、万物ヲ秤定メシコトアリ。姓氏錄今ノ世モ外国ヨリ有用ノ物ヲ取来ルコトア

ラバ、国益ノ一端ナルベシ。

寛政ノ頃、和泉国貝塚ノ人、岩橋甚兵衛ト云者、自ラノ工夫ヲ以テ日月ヲ見ル遠鏡トホメダネヲ製セリ。其後西洋ヨリ望遠鏡渡來シタルニ、其制作同ジカリシト云ヘリ。凡テ器械發明ナドハ、此国人本ヨリ西洋ニ及バネドモ、勉強スレバ如此キ者アリ。又、新聞紙ニ載タル潰銅ヲ銀性ニ變製シ、鉄銃ヲ銅ニ變製スル法ヲ發明シ、又、頑癖ノ治術ヲ發明シテ、欧羅巴人ヲ感歎セシメタル類、極メテ小事ト云ヘドモ、勉強ノイタス所、又、嘉賞セズンバアル可カラズ。

天理

天ハ万物ノ元ニシテ、天神ノ神留リ坐ス神域也。漢籍ニ、天道ハ生ヲ好ムトモ、誠ハ天ノ道也トモ云ヘルハ、実ニ確言ナリ。万物生々シテ止ザル、コレ天ノ道理ナリ。ソノ偶タマク殺スコトアルモ、畢竟生シメンガ為ナル事、三冬霜雪ノ草ヲ枯スハ、其翌春發生セシメンガ為ナルヲ以テ知ベシ。且日暮、夜明、暑往キ、寒來リ、春夏秋冬、毎歳易ルコトナシ。是天ノ誠ナル所也。人ハ天神ノ靈ニ依

テ生スル所ナレバ、天ノ理ヲ知り、天ノ道ニ從ハズハ、アル可ラズ。故ニ誠ノ心ヲ以テ、人ノ人タル道ヲ行フ。コレ天理ニシタガフ所以ナリ。

天照大御神五穀種子ヲ見マシテ、此物ドモハ顯見蒼生ノ食テ活クベキ物ゾト詔ヒシ、是天神ノ人民生々ヲ欲シ給フ本志ヲ伺ヒ奉ルベシ。其深恩決シテ忘ルベカラズ。扱恩ヲ思ハ、其御心ヲ心トセズバ、アル可ラズ。然レバ、力ノ及ブ限リハ、人ヲ助ケ救ハント志ザスベシ。

桓武天皇ノ御代、越後国蒲原郡ノ人、三宅連ミヤケノムラサキ雄麻呂ハ稲千万ヲ蓄ヘ、寒タル者ニハ衣ヲ施シ、飢タル者ニハ食ヲ与ヘ、又、道橋ヲ修理シ、人ノ為ニセリ。依テ從八位上ヲ授ケラル。本紀此類ナホアマタ有リ。

己ガ好ム所ハ人ニ施シ、己ガ惡ム所ハ人ニ施スコト勿レトノ戒、実ニ金言也。総テ人ヲ苦シメ、人ノ物ヲ奪フ類、人ノ為ニヨカラヌ事ヲバ、謹テナスマジキ也。

白河天皇ノ御時、九重塔ノ金物ヲ牛皮ニテ作レリト云コト聞エテ、修理セシメタル定綱朝臣事、ニアフベキ由也。爰ニ仏師某ヲシテ塔ニ上リテ検査セシムルニ、半途ニシテ反リ下リテ、恐ロシサニ登リ得ズト申セリ。蹟隆卿聞

レテ、人ノ罪蒙ルベキヲ知リテ、自ラ嗚呼ノ者トナレル
ヲ賞嘆セラレタリ。十訓抄

後冷泉天皇ノ御時、源中納言経衡卿、檢非違使別当ニテ、
十五年マデ事ヲ行ハレタルガ、或時、獄ニ火アリシカハ、
罪人ヲ逃サント云者アレド許サズ、サル不仁ナル故ニヤ、
其子孫絶タリ。同上 恐ルベキコト也。

偕、人ノミナラズ、鳥獸虫魚モ成ルベキ丈ハ憐ミテ、妄
ニ害スベカラズ。神代ニモ大國主神ハ兔ヲ助ケ、日子
穗々出見命ハ川雁ヲ救ヒ給ヘリ。神習人ヨク思フベシ。

欽明天皇若ク坐々シ時、御夢二人アリテ、秦ハダノ大津父ト

云者ヲ寵シ給ヘトイヘリ。爰ニ使ヲ遣シテ求メ給フニ、
山背國紀伊郡深草ノ里ニテ得タリ。召シ出シテ、汝何事

有ヤト問ヒ給フニ、事無シ、唯臣伊勢ニ到リシ時、山ニ

二ノ狼相闘クヒテヒタルニ逢ヒ、馬ヨリ下テ、汝ハ貴キ神也、

モシ獵士ニ逢ハゞ禽ハル、コト尤速ケント云テ、放チ遣

リテ助ケタリト答ヘタリ。天皇此報ナラント詔ヒテ優寵

シ給ヒ、皇位ミコトノニ即給フニ及テ、遂ニ大藏卿ニ拜シ、大ニ

饒富ヲ致シタリ。日本紀

中納言山蔭卿、漁人ノ龜ヲ捕ヘタルヲ放チタルガ、後ニ

其幼子ノ後母ニ憎マレテ水中ニ入ラレタルヲ、カノ龜背
ニ負ヒテ助ケタリ。十訓抄

又、余語大夫ト云者、難ヲ避テ山中ニ入りシ時、蛛網ニ
蜂ノカ、レルヲ助ケタリシカ、敵兵ニ困レテ危カリシヲ、
數多ノ蜂來テ、敵ヲ螫シテ退ケタリ。同上

歷朝ノ詔詞ニ、清キ明キ誠ノ心、或ハ直キ正シキ忠ナル
誠ノ心杯云コト尤多シ。コレ天道ノ誠ニ明ケク、清ク正
キニ法リテ、偽ルコトナク、矯ルコトナキ誠ノ心ヲ以テ、
万事ヲナス可キヲ云ナリ。古事記ニ、春山霞壯夫ノ母ノ
語ニ、我御世ノ事、能コソ神習ハメ、青人草習ヤ其物ヲ
償ハヌトアリ、神ハ誠ナル故、ソノ神ニ習ヒテ偽無ルベ
キヲ、人草ノ弊習ニナラヒテ、誠ナラヌ行アリシヲ咎メ
タル也。然レバ、誰モ御祖タル神ニ習ヒテ、誠ノ心ヲ忘
ルマジキコト也。

天道ハ順環シテ究リナク、生々化々、瞬息モ停ラズ。故
二人モコレニ徼ヒテ、少シモ怠慢ナク、其職ヲ尽サズハ
有可ラズ。貴賤貧富、其ナス所ノ職業ハ異ナレドモ、何
レモ皆天理ニ從ヒテ勤ルニ非ルコトナシ。光仁天皇宝龜
十一年正月ノ詔ニ、政先トシ「儉約」志在「憂勤」、トモ見エ

テ、能勤ムト云トモ、驕甚シケレバ、国家必ズ乱ル、也。
儉約トハ驕奢ナラザルヲ云。大凡天地間ニ生ズル物、皆
必ズ其用アリ。其物ノ性ニ從ヒテ用レバ、一ツトシテ棄
ツベキ物ハナシ。是天ノ理ナリ。又、イカナル微少ノ物
モ、妄ニ棄ベカラス。天物ヲ損スルトテ大ナル僻事ナリ。
青砥左衛門尉藤綱ガ滑川ニテ十文ヲ落シタルヲ、五十文
ニテ松炬ヲ買ヒ、人夫ヲ雇ヒテ拾ハセタル事、記太平世
ノ人ノ知ル所ナリ。

土井大炊頭利勝一尺許ノ唐糸有リシヲ拾ヒテ、近習ナル
大野仁兵衛ニ預ケ、大事ニナシ置ベシト命ズ。傍ノ人々
カ、ル糸屑何ニカナラント窃ニ笑ヘリ。二三年過テ利勝
仁兵衛ヲ召ビ、先年ノ糸ハト尋ヌレバ、ヤガテ巾着ヨリ
取出テ捧ゲヌ。利勝脇差ノ下カ緒ノ解タルヲク、リテ家
老寺田与左衛門ニ向ヒ、仁兵衛吾預ケシ糸屑ヲ大切ニナ
シタルハ殊勝ナリ、三百石加増ヲ与フベシ。吾此糸切ヲ
大切ニスルハ、元來唐土ノ民ノ蚕ヲカヒ、糸ヲ取りテ渡
シタルヲ、長崎ノ商人買トリ、大坂へ廻シ、江戸ニ下セ
ルハ功勞如何計ナラン、少シノ物トテ麓末ニセン事ハ天
道へ恐アリ。今下カ緒ノ先ヲク、リタレバ、用ニ足りヌ、

吾ヲ吝嗇ト笑ヒシモ有リシナレド、吾ハ一尺ノ糸ヲ三百
石ニカヒタルゾト示シタリ。責而者草 万事ニコノ心得アル
ベキ事ナリ。総テ是ニ限ラズ、儉約ト吝嗇トハ、似テ非
ナル者ナルハ、誰モ弁ヘタルガ如シ。

徳川家康公板坂卜齋ニ朝鮮人參ヲ与ヘラレシカハ、卜齋
違棚ナル奉書紙ヲ取テ包マントスルヲ公止メ給ヒテ、奉
書ハ吾諸大名へ書ヲ送ル時ニ用ル也。人參ハ大切ナル物
ナレド、紙ニテ包メバ其紙皺カニ成テ、外ノ用ニ立難シ。

汝ガ羽織ヲ出スベシトテ、羽織へ包テ与ヘラレタリ。省三
録凡ソ驕奢ヲ省キ、質素節儉ヲ用ルハ、天物ヲ妄ニ栄
耀ニ遣ヒ捨ザル善行也ト知ルベシ。

延喜天皇ノ御時、制度ヲ立ラレタルニ、奢侈ノ風止ガタ
ケレバ、天皇時平大臣ト謀リ給ヒ、一日大臣盛飾シテ參
朝アリケルヲ天皇見給ヒテ、大臣ハ百官ノ長トシテ、何
ゾ国法ヲ犯スヤトテ怒リ給ヒシカハ、大臣大ニ恐レテ謹
慎アリ。コレヨリ奢侈ノ風止タリ。大鏡

後三条天皇ハ専ラ節儉ヲ行ヒ給ヒ、御扇ハ檜柄藍紙ヲ用
ヒラレ、又、青魚頭ヲ炙リテ胡椒ヲ塗リテ御膳ニ用ヒ給
ヘリ。又、先御代ヨリ風俗奢靡ナリシカ、天皇即位ノ始、

男山ニ行幸アリシ時、金ニテ飾レル車イト多シ。依テ悉ク其金ヲ除カセ給ヒケリ。其後又、加茂ヘ行幸有シニ、金飾ノ車一ツモ無リシト也。古事談
今鏡

右大将源頼朝卿、アル時、藤原俊兼カ衣服ノ美麗ナルヲ見テ、千葉常胤、土肥実平ナドハ礼法ヲ知ラネドモ儉約ニシテ士卒ヲ養ヘリ。汝ハオアルニ、何ゾ儉ヲ守ラザルヤトテ、刀ヲ以テ其袖ヲ裁タリ。東鑑

井伊直孝ノ奢靡ナル風ヲ改ントテ、江戸ヨリ帰ル時、供ノ者ハ更ナリ。自ラモ木綿ノ汚レタル衣ヲ着テ、駕輿ノ戸ヲ開キ城ニ入ル。彦根ヨリ迎ニ出タル者ハ、皆美服ヲ着タレバ、大ニ愧テ、其レヨリ質素ノ風ニナレリ。責而者
草

人道之上

人ノ道ハ多端ナレドモ、要スル所ハ人倫ノ道ヲ知テ、其理ヲ違ヘズ、行フニアリ。人倫ハ君臣、親子、夫婦、兄弟、朋友コレ也。君親夫兄ハ上也。臣子婦弟ハ下也。上ハ下ヲ愛シ恵ミ、下ハ上ヲ貴ビ敬ヒ、各各誠ノ心ヲ以テ相交ルヲ人道トス。此五ノ中、君臣ヲ最重トス。外国ニハ父子ヲ重シトシテ、孝ハ百行ノ本トモ、忠臣ヲ孝子

ノ門ニ求ムトモイヘド、吾国ニテ云ハ、父子ハ一家ノ親ニテ、鳥獸モ猶子ヲ愛スルモノナルヲ、君臣ハ邦国ニ関リテ、事最大也。且、我君ト申スハ、畏クモ皇上ヲ指シ奉ル事ニテ、華士族平民ノ差アリト雖モ皆臣ナリ。八幡ノ大神ノ託宣ニ、我カ国家開闢以來、君臣定ル矣、以テ臣ヲ爲ス君ト、未レ之有一也、ト詔ヒ、天地ノ初ヨリ君臣ノ分定リテ、動ク事ナキ御国体ナレバ、君臣ノ道ヲ最重シトスル事ナリ。天照大御神、其御孫天津彦火瓊々杵尊ヲ天降シテ天下ノ君ト定メ給ヒ、其御詔ニ、葦原、水穗、国ハ吾子孫ノ王ト座ベキ地ナリ、爾皇孫就テ治シメセ、宝祚ノ隆ハ天壤ノ共究無カルベシト詔ヘリ。コレニ依テ御代御代ノ天皇ノ天下ヲ治メ給フコトハ、皇祖天神ノ大御心ヲ御心トシ給ヒテ、人民ヲ撫安シ給フニテ、是即天皇ノ天神ニ代リ給フ所ノ天職ナリ。文武天皇ノ元年ノ詔ニ、天坐ノ神ノ依シ奉シマニマニ云々、此食国天下ヲ調給ヒ、平給ヒ、天下ノ公民ヲ恵ミ給ヒ、撫給ヒ云々ト見エ、元明天皇ノ慶雲四年ノ詔ニ、此食国天下ヲ撫給ヒ、慈ミ給フコトハ辞立ニ非ズ、人ノ親ノ己ガ弱兒ヲ養治スコトノ如ク、治メ給ヒ、恵給ヒ来ル業トアリ。実ニ親ノ子ヲ養フ如ク、

万民ヲ愛シ養ヒ給フコト也。扱、小事モ一身ノ力ニテハ成シ難シ。天下ヲ治ムルハ大事ナレバ、天皇御一身ニテハ万機ノ政ハ執行ヒ給フコト能ハズ。必ズ群臣百寮ノ輔翼ナクハ有可ラズ。孝徳天皇ノ詔ニ、君_レ於_レ天地之間_レ而宰_レ万民_レ者不_レ可_レ獨制_レ要須_レ臣翼_レ由_レ是代々之我皇祖等共_レ卿等祖考_レ俱治朕復思_レ欲蒙_レ神護力_レ共_レ卿等_レ治_レト見エ、孝謙天皇ノ天平宝字二年ノ詔詞ニ、皇ト坐テ天下治給フ、君ハ賢人ノ能臣ヲ得テシ、天下ヲバ平ク安ク治ル物ニ有ラシ云。朕拙弱トモ親王ヲ始テ王臣等ノ相穴ナヒ奉リ、相扶奉ラン事ニ依テシ、此ノ仰給ヒ授給フ食國、天ノ下ノ政ハ平ク安ク仕奉ルベシトナモ念シ行ス。是以諂欺ク心ナクシテ忠ニ赤キ誠、以テ食國天下ノ政ハ衆助ケ仕奉レト見エタリ。カク君ハ臣ヲ慈ミ、臣ハ君ヲ敬ヒ、上下和合シテ國家ヲ治ンニ、太平ヲ致サランヤ。聖武天皇天平勝宝元年ノ詔ニ、大伴佐伯宿禰ハ云々、汝等ノ祖トモノ云来ラク、海行バ水着屍、山行バ草ムス屍、大君ノ辺ニコソ死ナメ、閑ニハ死ナジトイヒ来ル人トモトナモ聞召ストアリ。此ニ_二氏ノ祖ハ天_一忍日_レ命トテ、天孫降臨ノ時、靴ヲ負ヒ、劍ヲ佩キ、弓矢ヲ手挟ミ、御前

驅シテ降り給ヒ、代々武事ヲ以テ奉仕セリ。故ニカク言立シ給ヘルナレト、臣タル者ハ此氏ノミナラズ、誰モカクノ如ク心得ベキ者ナリ。

仁徳天皇高殿ニ昇リテ見給フニ、民家煙甚少シ。コハ民ノ貧シキ故也トテ、租課ヲ免シ給ヒ、宮垣敗ルレドモ修ズ、屋瓦雨モレドモ葺ズ、三年ニシテ又國中ヲ見給フニ、炊煙繁ク立シカバ、朕既ニ富リトテ大ニ喜ビ給ヘリ。本日

紀

朱雀天皇御性質寛大ニ坐々ケルヲ、左大臣忠平公諫メラレケレバ、天皇ノ勅ニ、昭宣公_{経基ノ}云レシト、先帝ノ詔ヘルヲ承ル事アリ、政ハ琴ヲ張ルガ如シ、大絃急ナレバ小絃絶ユ、朕モシ嚴ナラバ、下民堪ベカラスト詔ヘリ。

古事談

イト後ノ事ナガラ、備前少将光政朝臣、板倉伊賀守勝重ニ国政ノ事ヲ問ハレシ答ニ、角ナル箱ニ味噌ヲ入テ丸キ杓子ニテ取ル如ク計ラヒ給フベシ。侯ノ如キ心ヲ政事ニ用ル人、國中隅々マデ行届ヤウニト思ヘバ宜シカラズ、国政ハ寛大ナラザレバ人心ヲ得難シト答ヘタリ。者_{貴而草}コレモ此意ナリ。

一条天皇、アル時、寒夜ニ御直衣ヲ脱給ヒシカハ、イカナル御事ト問ヒ奉ルニ、下民貧クシテ衣ヲ得ザル有ベシ、朕何ゾ一人温ナルベケンヤト詔ヘリ。一説ニ、此事ハ延喜帝ナリト云ヘリ。古事談

以上君道

垂仁天皇ノ御代、田道間守ト云者ニ勅シテ外国ニ往テ非時香菓ヲ求メシメ給フ。コレハ後世橘ト云モノ也。田道間守ハルバル外国ニ渡リ、十年ヲ経テ帰朝セルニ、天皇崩御シ給ヘリ。依テ大ニ泣悲ミ、御陵ノ前ニ至リテ香菓ヲ持参来テ候ト云テ、叫ビ泣ツ、遂ニ泣死タリ。日本紀
孝徳天皇ノ御代ニ、蘇我倉山田石川麻呂ト云大臣アリ。忠臣浅カラザリシカド、其弟身刺ガ讒ニ依テ誅セラレントス。大臣歎息シテ、人臣タル者、何ゾ君ニ逆ヲ違ヘン。何ゾ父ニ孝ヲ失シ、我レ身刺ニ譖セラレテ誅セラルト云トモ猶忠ヲ懷ヘリ、我願クハ、生々世々、君王ヲ怨ミ奉ラジト云ヒテ、自ラ経シテ死シタリ。同上
敬神ノ条ニ記セル和氣清麻呂朝臣、道鏡ガ威ヲ恐レズ、八幡大神ノ御託宣ノマ、ヲ奏シタルコト、実ニ比類ナキ

精忠ト云ベシ。此時道鏡モシ位ニ即クコト有ラバ、唯暫時ノ程ナリトモ、実ニ国体ニ関テ容易ナラザル大事也シヲ、此卿ノ一言ニ依テ皇位他ニ移サザリシハ、何ニ大功ナラズヤ。

粟田アノヒラ大臣藤原在衡公ハ中納言山蔭卿ノ孫ナリ。学才有リ。追々登庸セラレ、円融天皇ノ御時ニ左大臣ニ昇進セリ。嘗テ参朝スル車中書ヲ讀ム。顧問ヲ承レバ必ズ其書中ノ事也ト云。或日風雨甚シカリケレバ、在衡モヨモ今日ハ参朝セジト人皆思ヒ居リシニ、傘ヲサシ深沓ニテ参朝セラレタリ。古事談

太政大臣良房公忠仁公是也仁明天皇ノ御代ニ天皇五石ヲ煉リテ近臣ニ嘗ヨト詔フニ、イヅレモ畏レ難カル色有リ。良房公タチニ坏ヲ取テ一口ニ飲マレタリ。天皇モ深クコレヲ感ジ給ヘリ。続日本後紀

臣ノ中、貴賤異ナレバ、主トナリ従トナル事アリ。是其大要ハ君臣ノ義ニ同ジ。但シ、万世ノ大君ト一世或ハ二三世数十世ノ主トハ、自然輕重ノ別ナキ事能ハズ。故ニ主人モシ天皇ニ背クコトアル時ハ、従者決シテ其主ノ意ニ従ヒテ大君ニ背ク理ナシ。コレ皇國ハ他國ト同ジカラ

ズ。天皇ハ天神ノ定メ給ヘル処ニテ、天地ト共ニ究リナク、奉戴スベキ大君ニ坐々故ナリ。能思ヒ弁ヘテ方向ヲ誤ルベカラズ。今コ、ニ、従者ノ主人ニ誠ヲ尽シタル談ヲ一二挙グベシ。

安康天皇ノ御代、大草香皇子ヲ殺シ給ヘル時、其御許ニ事ヘシ難波^{吉師}日香^{ヒガカ}蚊^カ父子悲、ミ傷ミテ、父ハ皇子ノ頸ヲ抱キ、二人ノ子ハ足ヲ執ヘテ云ラク、吾君罪ナクシテ殺サレ給ヘル事イト悲ムベシ、我等父子生テ事ヘ奉リ、死テ殉ハズハ不忠ナリトテ、皇子ノ側ニテ自ラ刎テ死セレバ、軍士等皆涙ヲ流セリ。日本紀

同天皇三年、履仲天皇ノ御子市辺^{イチノベノオシノ}押齒皇子、雄略天皇ニ殺サレ給ヒシ時、皇子ノ帳内、佐伯部仲子モ共ニ殺サレタリ。皇子ノ御子、億計王^{天皇}仁賢、弘計王^{天皇}顯宗、帳内日下部連使主^{オミ}、其子吾田彦二伴レテ逃レ給ヒ、丹波国ニ至リ給ヒシカ、使主ハ猶誅セラレンコトヲ恐レテ、播磨国縮見山ノ石屋ニ隠レ自經シテ死セリ。吾田彦ハ終始二王ニ從ヒ奉リテ去ラズ、播磨国赤石郡二忍バセ奉レリ。同上
村上彦四郎義光ハ元弘ノ乱ニ大塔宮ニ從ヒ奉リ、紀伊国二趣ラムトス。此時芋瀬庄司ト云フ者、宮ヲ留メ奉ルニ

依テ、錦御旗ヲ与ヘテ立去給フ。義光追至テ、彼御旗ヲ持シ者ヲ捉テ、二三丈投ゲ御旗ヲ奪返^シヌ。其後、宮ハ吉野ニ籠リ給ヒシカ、遂ニ賊ノ為ニ落城ニ及ベリ。是ニ於テ義光宮ニ代リ奉リ、腹カキ切テ失ケレバ、其隙ニ宮ハ高野山ニ逃レ給ヘリ。太平記

寛文中ノ事ナリシカ、高崎城主安藤家ノ納戸ニテ、脇差失タリ。然ルニ、納戸役何某ガ箱ノ中ニ在シカハ、此人罪セラレントセンヲ、其従者云フヤウ、実ハ某ガ取タルヲ主ノ箱ニ入レ置タル也ト云シニ依テ刑セラレタリ。年月経テ、奥坊主罪有テ刑ニ臨ム時ニ云ケルハ、始メ納戸役某ノ従者ガ奪ヒシト云ヘル脇差ハ吾盜メルナルガ、己ガ罪ヲ免レントテ、他人ノ箱ニ入レ置タルナリ、今刑ニ臨ンデ此事ヲ思ヘバ、彼従者ガ誠忠、感ズルニ堪ザル故ニ白状スル也ト云ヘリ。主人ノ難ヲ救ハントテ、其身冤罪ニ死セシハ、真ニ主人ニ忠誠ナリト云ベシ。明良 洪範
若狭国小浜ノ武家ニ事ヘシ十三四ノ小女、綱ト云者、主人ノ小兒ヲ負テ出シニ、狼ニ逢テ逃レ難キ故ニ、己レ狼ニ食レテ小兒ヲ救ヘリ。領主大ニ是ヲ感ジ、碑ヲ立シメ、忠烈綱女之墓ト記シ、儒臣小野忠次郎ニ碑文ヲ作ラシメ

シトソ。同上

主人ニ仕ル者ハ、何事モ君主ノ為ヲ思ヒテ、私ノ事ハ思フベカラズ。殊ニ私ノ恨ヲ以テ人ヲ退ケ、己ノ好ミヲ以テ人ヲ挙ル事、尤アルマジキ也。

藤堂和泉守高虎ト加藤左馬助嘉明ト朝鮮陣ノ時、功ヲ争ヒテ不和ナリシカ、寛永四年会津ノ蒲生下野守卒シテ舍弟中務大輔、伊予松山ヘ移サル。依テ將軍家高虎ヲ召シ、会津ハ枢要ノ地ナレバ、汝ヲ守トセント有シニ、高虎謹デ、某ハ年老テ遠方ノ任如何也ト辞ス。サラバ誰カ然ルベキト問ハル、ニ、嘉明コソ其器ニ当リ候ヘト申ス。彼ハ多年不和ナル由ナルニ、何故ニ推挙スルヤト怪マレシカハ、答テ遺恨ハ私事ナリ、何ゾ私ヲ以テ国ノ大事ヲ廢シ候フベキト申セリ。將軍家モ感ゼラレ、嘉明モ聞テ感涙ヲ流シ、高虎ト和親セリトゾ。實而者輩

松平伊豆守信綱ハ病氣大漸ニ至リシカハ、人々念仏ヲ勸メシニ、我ハ主君ノ恩ヲ蒙ルコト大ナレバ、其万分一ノ御恩ヲ報セント思ヘドモ、行届カズ。今大病ニテ弥心外ノ事而已ナリ。サレバ、御奉公御奉公トハ申スベケレド、念仏スル暇ナシトイハレタリ。又、主君ノ忌日ニ死ナヌ

ヤウニシタシトノ望ミナリシガ、十七日ハ家康公ノ忌日ナレバトテ、十六日ニハ薬ヲモ止メ、本意ノ如ク死去セリ。同上

本多中務大輔忠勝、三代將軍家光公若年ノ頃、酒井山城守ヲ愛シテ度々彼家ヘ夜行セラレケレバ、途中イト心元ナク、見エガクレニ一人ツキ従ヘリ。一夜イト寒キニ公ノ穿レタル草履ヲ懷ニシ、還ラル、時刻ヲ考ヘ、窃ニ直シ置シカ、アツクマ温リアリケル故、怪ミテ尋ネラル、ニ、忠勝ガセシ也ケリ。依テ召出シテ謝セラレシカハ、恐コマリテ、大切ナル御身ニテ、御夜行アルハ以ノ外ノ御事也、此事近習ノ者一人ニ聞エテモ御大事ナレバ、数ナラネドモ御供仕タル也ト申セシカハ、公モ大ニ恥テ夜行ノ事止ラレタリ。同上

君ニ御過アル時ハ、諫メ奉ルモノノ忠義也。ソハ其御過大ナル時ハ、天下ノ乱レトモナリ、又、後世迄モ畏ケレド、議シ奉ル事モ出来レバ也。

持統天皇三年、伊勢ヘ行幸ナラントノ事ナリシカハ、中納言三輪朝臣高市麻呂上表シテ春ノ時遠遊セバ、農事ヲ妨ゲントテ諫メ奉ルニ用ラレズ。後參朝シ、冠ヲ脱テ諫

メ奉レリ。サレド聞召シ給ハザリシカバ、官ヲ辞セリ。

日本紀
櫻風藻

後醍醐天皇ノ御時、出雲国司塩谷高貞、千里ノ馬ヲ獻ゼリ。群臣瑞物ナリトテ賀シ奉ル。中納言万里小路藤房卿申サレケルハ、周穆王ハ駿ニ乗テ西方ニ遊ビ、戎狄乱ヲナシ、漢文光武ハ千里馬ヲ受スシテ治平ヲ致セリ。方今天下初テ定テ賞罰中ラズ、若叛ク者アランニハ、此馬軍国急ヲ告ルノ用トナルベシ、仁徳ヲ以テ天下ヲ治メ給ハンニハ、馬ハ用ル所ナシト、詞ヲ尽シテ諫メ申シケレド、用ヒ給ハザリケレバ、官ヲ棄テ、山ニ隠レラレタリ。

太平記

織田信長公若カリシ時、行跡ヨカラズ。平手政秀シバく諫レドモ聞レズ。依テ書置ヲ遺シテ、君モシ某ノ言ヲ用ヒ給ハゞ、死ストモ恨ナシト云テ自殺セリ。信長其書ヲ見テ大ニ悲ミテ行ヲ改メ、清洲ニ寺ヲ立テ政秀寺ト云。又常ニ、吾今日アルハ政秀ノ功也ト云レタリ。

信長譜
政秀寺

記曰

酒井雅楽頭忠世ハ三代將軍家光公ノ後見ナリ。一時公ノ床上ニ刑部梨地ノ印籠ヲ置レタルヲ見テ申スヤウ、神君

家康駿府御在城ノ時、小性ノ着セル袴ヲ、ソレハ何ト云

物ゾト仰有シニ、茶宇ト申ス由答ヘシカハ、大ニ怒リ給

ヒ、憎キ奴カナ、天下久シク乱レテ此頃少シ静ニ成シヲ、

我名ダニ知ラヌ衣類ヲ用ルハ乱ノ端ヲナスナリトテ、夕

飯ヲモ聞召サザリシ。然ルヲ、今カ、ル花美ナル翫物ヲ

賞シ給フコト以ノ外也トテ、庭石ニ打アテ、碎キ捨タリ。

真而者草

越前宰相忠直卿荒々シキ性質ナルガ、一日鷹野ヨリ帰ラ

レ、今日程面白ク思エシコトナシト云ハル、ヲ、杉田壺

岐進ミ出テ、只今ノ御詞ハ御家滅亡ノ兆也ト云。卿怒テ

何故ゾト問ハル、ニ、毎度ノ御鷹野衆人迷惑スル上ニ、

少シモ御心ニ叶ハヌ事アレバ、嚴シク御叱アリ。又ハ御

手打ニモ成ル事ユエ、皆畏レアヘリ。今日ハ兎角死力ヲ

出シテ御供セシ故、面白ク思召シタルナリ。夫故、御家

滅亡ノ兆ト存ズル由申セバ、卿大ニ怒リ、既ニ刀ニ手ヲ

カケラレシカ、人々杉田ヲ外ヘ退ケヌ。此時、杉田イヒ

ケルハ、某ハ足輕ヨリ御取立ニ成シ者ナレバ、御手打ニ

成ルマデハ諫言申スナリト云ヘリ。其夜卿杉田ヲ召シ、

先刻ノ事面目ナキ事ナリ、今膳ニ向ヘドモ、汝ガ許スト

云マデハ食事進ミ難シ、是ハ先ニ手ヲカケシ脇差ナリトテ、手ヅカラ是ヲ与ヘラレタリ。同上

尾張大納言義直卿ノ書院ノ柱ニ何物カ張紙シテ、家中九人ノ者ノ悪事ヲカキ、惣テ十人ト記セリ。怪ミテ如何ナル事ナラント問ハル、ニ、右筆持田治左衛門ト云フ者、

カノ一人ハ君ニテ坐々ナリトテ、卿ノ悪事ヲ申シケレバ、卿大ニ怒リ、持田ヲ殺スベシト命ゼラル。爰ニ竹腰山城守、其直言ナルヲ賞シ、卿ヲ諫メテ罪ヲ免シ、加増ヲ与フル事ニ成シタリ。同上

臣下ニテモ国郡ヲモ治ムル者ハ、天朝ニ代リ奉リテ天神ノ愛養シ給フ万民ヲ治ムルナレバ、尤仁慈ヲ施スベキナリ。秋月佐渡守ハ学ヲ好テ仁ヲ施セル賢者也。凶年続テ民苦ムト聞テ、好メル煙草ヲモ用ヒズ、専ラ費ヲ省キ、下々ヲ救フヲ念トス。故ニ他領ノ如ク飢死スル者ナシ。又或時、鷹野ニ出シカ、百姓等ノ弁当ヲ見ルニ、稗粟ノ団子ナドナレバ、涙ヲ流シテ百姓共身ヲ勞シテ麦ダニ食ハズ、カ、ル物ノミ食フ。是ヲ知テ自ヲ慎ミ、下ヲ養フベシトテ、自身ヨリ始メテ供ノ者マデ残ラズ其弁当ヲ分テ食シ、携ヘタリシ弁当ヲ百姓等ニ与ヘシカハ、下々能

帰服シテ、上ノ安泰ヲ祈レリ。

玉銚百首ニ、「天照ス神ノ御民ゾ御民等ヲオホロカニスナ預レル人」、「皇神ノメグ、思ホス人草ゾ世ノ中ノ人悪クスナユメ」、杯アル歌ヲ民ヲ治メン人々ハ、常ニ能心ニトメテ下ヲ憐レムベキコトナルベシ。

下民ノ裁判ヲナスモ、君主ニ代リテ国事ヲ執ルナレバ、尤公正ニシテ、仮ニモ賄賂ニ惑ヒ、不公不正ノ事アル可ラズ。

従四位下信濃守橘朝臣良基、嘗テ五国ノ守ニ歴任シ、其罷テ帰ル毎ニ資ヲ載ルコトナシ。子孫ニモ身ヲ潔スルヲ教フ。其子総テ十一人有シカ、第六子在公国ヲ治ムル道ヲ問フニ、百術アリト雖モ一清ニ如カズト答ヘタリ。代三

録実

正五位下藤原朝臣高房ハ身長六尺、力量人ニ過ギタリ。天長四年ニ美濃介ニ成テ、威恵並ニ施シ、属託行レズ、境ニ盜賊ナシ。安八郡ニ陂渠アリ。土人ノ諺ニ、神アリテ水ヲ過ルコトヲ欲セズト云テ、壞レドモ修メズ。高房ノ云ク、苟モ民ノ利アラバ死トモ恨ミズトテ、堤ヲ築シメタリ。又、席田郡ニ巫アリ。怪術ヲ行ヒテ民ノ害ヲ成

セリト云ヘドモ、古ヨリ恐レテ其所ニ行カズ。高房單騎ニテ至リ、悉ク其同類ヲ捕ヘシカハ、其後ハサル害止ミタリ。文徳実録

板倉周防守重宗ハ京都所司代ヲ三十年勤メ、民ノ訟ヲ聴クコト尤公正ニテ、高名ノ人也。毎日決断所へ出ル時、必ズ愛宕ノ神ヲ遙拝シテ、某少シモ私ヲ行ハジトスレドモ、若万一私ヲ行フ事モアラバ、速ニ命ヲ召サルベシト祈リテ出シトナリ。真而者草

以上臣道

明教事実 上巻終

明教事実 下巻

人道之下

親ノ子ヲ愛シ慈ムコトハ、メヅラシカラザル常道ナリ。然レバ、子トシテハ親ヲ敬ヒ、能コレニ事ヘテ其恩を報ズベキコト、是亦当然ノ理ナリ。元來、人ハ天神ノ恩頼ニヨリテ生ル、物ナレドモ、父母ノコレヲ生ミ、コレヲ育フニアラザレバ、世ニ出ルコト能ハズ、生長ツコト能

ハズ、母ノ胎内ニアリシヨリ、生レ出テ人トナルマデノ苦勞、筆舌ノ能尽ス所ナランヤ。故ニ如何ニ孝養ヲ尽シタリトモ、万分ガ一ナルベシ。水戸黃門光圀卿ノ語ニ、子ホドニ親ヲ思ヘ、子ナキモノハ身ニクラベヨト示サレシハ、実ニ然ル事ナリ。

恩愛ヲ棄ル釋氏ノ教ニモ愛無^レ過^レ子トイヘリ。サレド、タゞ姑息ノ愛ニ溺レテ、正シク教ヘ立ザレバ、反リテ悪ムニ同ジ。愛セバ教フルコト無^ラムヤトイフ語アリ。

延元元年、楠判官正成卿、桜井ノ宿ニテ子息正行ニ遺言シタル事、又、湊川ニテ打死ノ後、正行父ノ首級ヲ見テ自殺セントセシ時、其母ノ諫メタル事ナド、人ノ普ク知ル事ナレバ、詳ニハ記サネドモ、是等実ニ龜鑑トスベシ。事ノ大小、身ノ貴賤ニ從ヒテ、一樣ニハアラネドモ、其意味ハ誰モカクノ如クナルベキ事ナリ。父母ニ事ル者

ハ君臣トカハリテ、天然ノ愛情ヨリ出ルナレバ、顔色言語、皆相和テ、其意ニソムク事ナク、富貴ナルハ固ヨリ貧賤ナリトモ、力ノ及ブ限り、美物ヲバ進ムベキナリ。偕、死シタル時ハ厚ク葬リ、祭祀ヲモ懇ニ行フベシ。外国ノ説ニハ、父母先祖ヲ祭ルヲ宣シカラズト云フモアル

由ナレドモ、以ノ外ナル僻言ナリ。其由ハ別ニ云ベシ。
昔、神武天皇天神天祖ノ靈ニヨリテ賊ヲ平ゲ、天下治リ
シカバ、皇祖天神ヲ祭リテ大孝ヲ申ベントテ、鳥見ノ山
中ニ靈時ヲ立テ、郊祀ヲ行ヒ給ヘリ。其後歷朝、先皇ノ
祭祀怠リ給ハズ、当今ニ及ビテ列代ノ皇靈ヲ神祇官ニ鎮
祭シテ、民ニ孝敬ヲ示ス^{テキ}式トナシ給ヘリ。然レバ、賤
シキ下民モ上ノ風ニ習ヒ奉リ、其分々ニ先祖父母ノ祭礼、
怠ルマジキモノ也。

仲哀天皇ハ御父日本武尊ノ神靈、白鳥ト化テ昇天シ給ヘ
ルヲ以テ、白鳥ヲ養ヒテ其情ヲ慰ント詔タマヒ、諸国ヨ
リ白鳥ヲ貢シメ給ヘリ。然ルニ、蒲見別王見テ、白鳥モ
焼バ黒鳥トナラントテ、其鳥ヲ奪ヒ給ヒケレバ、天皇ソ
ノ不孝ヲ惡ミ給ヒ、コレヲ誅シ給ヘリ。日本紀

天智天皇未ダ太子ニテマシ、ケル時、妃蘇我造媛、其
父倉山田麻呂讒死セラレシカ、物部ニ田造塩トイフモノ
ニ斬ラレタル由、聞テ哀ミ傷ミ、塩トイフ名ヲモ聞コト
ヲ惡ミ給ヒシカハ、近侍ノ者塩ノ事ヲ堅^{キク}塩トイヒカヘケ
ルトゾ。造媛ハ遂ニ心ノ傷ヨリ病トナリテ死ラレタリ。

同上

元正天皇養老四年六月、漆部司令史從八位上、丈部忌寸
石勝トイフ人、司ノ漆ヲ盜ル科ニヨリテ、流罪セラル、
ニ決セリ。此時石勝ノ子、祖父麻呂年十二、安頭麻呂年
九、乙麻呂年七、三人官ニ訴テ申スヤウ、石勝已等ヲ養
ハン為ニ罪ヲ犯シタルナリ、祖父麻呂等三人ヲ官奴トナ
シ給ヒテ、父ガ重罪ヲ許シ給ヘト乞ヒ奉リケレバ、詔シ
テ、人稟五常仁義斯重、士有百行、孝敬為先、今祖父
麻呂等役身為奴、贖父犯罪、欲存骨肉、理在矜愍、
宜依所請、トテ石勝ヲ免シ給ヘリ。本紀

仁明天皇ノ承和九年、橘速勢謀反ノ事ニ与シタルニ依テ、
伊豆国ヘ配流セラル。爰ニ、ソノ娘泣悲ミテ其跡ニ從ヒ
ユクヲ、監送ノ官人叱リ、退シ故ニ、昼ハ留リ夜ハ行
ツ、遠江国板築、駅ニ至リシニ、逸勢病死シタリシカハ、
女ハ哀ムコト限りナク、駅下ニ葬リ、其側ニ廬ヲ作りテ
住リ。其後、嘉祥三年仁明天皇崩ジ給ヒ、文徳天皇御即
位アリ。逸勢ガ罪ヲユルシ、從五位下ヲ贈リテ京ハ歸葬
セシメ給フ。カノ女、屍ヲ負テ京ニ歸レリ。人皆孝女ト
云ヒテ誉メアヘリ。文徳
實錄

大和国添上郡ノ人、奈良許智麻呂、父母ニ孝アリ。後母

ノ讒ニヨリテ父ノ家ニ入ルコトヲ得ザリシカド、絶テ怨
ムル色ナシ。又、添下郡ノ人、倭忌寸果安ハツヤス、父母ニ孝ア
リ。兄弟睦シ、飢人病人ニ物ヲ施ス。其妻マタ善ク舅姑
ニ事フ。ソノ生メル子ト妾ノ子ト八人愛育スルコト、少
シモ替リナシ。和銅七年十一月、詔アリテ終身租徭ヲ免
ジ給ヘリ。統記

右京人衣縫造金継女、河内国志紀郡ニ住リ。十二歳ニテ
父ヲ失ヘリ。服畢リテ其母嫁ヲ許ス。女窃ニ父ノ墓ニ往
テ、朝夕哀慟ス。母コレヲ見テ嫁ノ事ヲ云ハズ。依テ還
リテ母ヲ養ヘリ。承和八年勅シテ位ヲサツケ、終身租ヲ
免シ、門閭ニ表シテ、人ニ知ラシメ給フ。同上

讃岐国三野郡ノ人、從四位上丸部臣明麻呂、年十八ニシ
テ都ニ入テ官ニツキ、当郡ノ大領ニ任セラレタルニ、ソ
ノ職ヲ父ナル外、從八位、上西成ニ讓ル。西成致仕シ、
母モトシキ耄テ、各其宅ヲ別ニシテ十里ヲ隔タリ。明麻呂
朝夕往来シテ孝養ヲ尽セリ。十里ハ今ノ六十町
バカリナルベシ依テ嘉祥元
年勅シテ位ニ叙シ、田租ヲ免ゼラル。統後紀

參議從四位下藤原良繩朝臣ハ、正五位下備前守大津ノ子
ナリ。齊衡元年冬、大津任国ニテ病ヤヒスト聞テ、速ニ走

リ赴ントセシヲ、天皇ユルシ給ハズ。大津遂ニ卒去セル
ヨシ聞テ、血ヲ吐キ氣絶セシカ、数刻ニシテ蘇ヨミレリ。
母紀氏病アリシ時ニモ、昼夜帶ヲモ解カズ、睫ヲ合セズ
シテ介病シ、喪ニ居テ哀号礼ニ過ギタリ。後母阿倍氏諸
子ヲ忌シカド、善繩ノミハ重愛セルニ依テ、純ニ謹テ事
ヘタリ。三代
実録

九条相国為光公桓德薨セラレシ時、其子、左中将道信朝
臣ノ歌、「カギリアレバケフヌギステツ藤衣ハテナキモ
ノハ涙ナリケリ」。拾遺其慕ノ情、歌詞ニ顯レタリ。

常陸国那珂郡山形村百姓、大串武左衛門、父市郎右衛門
兄介内ニ事ヘテ孝弟ヲ尽セリ。他行セントスルニ、父母
顔色ヨカラネバ止リヌ。又、何時ニ帰ラント云テ出レバ、
用事畢ラズトモ、必ズ其時ヲ違ヘズシテ帰レリ。壮年ニ
及デ妻ヲ娶ルニ、孝行ノ事ヲ云含メ、夫婦ニテ父母ヲ養
フ。市郎右衛門死シケレバ、哭泣シテ止マズ。ソノ靈ニ
仕フルコト、生人ニ仕フルガ如シ。母ニ仕ルコト、其旧キウ
ニ倍ス。毎夜床ヲノベ、先ヅ其身臥シテ寝ルニ快キカ否
ヲ試ミ、母寝人ラザレバ睡ラズ、母老テ氣力ナク、痰ヲ
吐キカネシカバ、口ニテ吸出セリ。父ノ代ヨリ借金アレ

ド、母ニハ不自由ナル状ヲ見セズ、母酒ヲ好ム故ニ、日々ニ与ヘタリ。又、母他ヘ行ントイヘバ、夫ハ耕ヲヤメ、妻ハ織ヲ止メテ二人介抱シテ伴ヒ行ケリ。母モ兄モ少ク休息ス可ト云ド、貧シケレバ、外ニ孝ヲナス力ナシトテ、少シモ怠ルコトナシ。兄ハ盲目ナリシカ、イト能ク養ヒタリ。水戸光圀卿、其孝ヲ感シ、自ラ其家ヲ訪ヒ、物ヲモトラセラレタリ。西山遺事

孟宗ガ筍、王祥ガ鯉ハ、遠キ唐土ノ昔語ト思ヒシニ、大和国葛下郡竹内村ノ寡婦いまト云者、父ヲ養ヒシガ、其老人病有リテ食事ス、マズ。寛文十一年六月十二日ノ事ナルガ、鰻鯉ヲ食マホシト云ヒシカド、山里ナレバ得ベキ方ナシ。然ルニ、其夜、厨ノ瓶ノ中ニ何カ落入シ音セシヲ、怪ミテ見レバ、鰻鯉入テアリシトゾ。又、河内国日下里ノ樵夫清七、母ニ孝アリ。母ノ鶉ヲ喰ハント云シカド、得ザリシ時、不意ニ鶉ノ来リシ事、右ハトモニ畸人伝ニ見ユ。孝感ノ致ス所、和漢古今カハラズト知ルベシ。

以上父子之道

天地ノ道、必ズ陰陽アリテ万物生々ス。故ニ夫婦ハ人倫ノ大道ニシテ、伊邪那岐伊邪那美ニ神、天神ノ勅ヲウケ、修理固成ノ功業ヲ立給フ時ニ、マヅ初メテ夫婦ノ礼ヲ制シ給ヘリ。ソモく天ハ上ニ位シテ尊ク、地ハ下ニ居テ卑シケレバ、男ハ尊クシテ先ダチ、婦ハ卑シクシテ後ルベキ定理ナリ。然ルニ、伊邪那美命アナニヤシエヲトコヲノ御言ヲ先ニ唱ヘ給ヒシカハ、良ラヌ御子ヲ生マシケル故、天神ニ奏シ給ヘバ、天神勅シテ婦女ノ言、先シニ因テ良ハズトノタマヘリ。然レバ、婦タル者ハ、常ニ柔順ニシテ夫ノ命ニ従ヒ、何事ニモ先ダチテ事ヲ行フベキニアラズ。漢国ノ語ニモ、牝鶏ノ晨スルハ家ノ破レ也ト云ヘリ。又、大国主神ノ御后、須勢理姬命ノ御歌ニ、「八千矛ノ神ノ命吾大国主コソハ男ニイマセバ、打見ル嶋ノサキザキ、カキミル磯ノ先落チズ、若草ノ妻モタスラメ、吾ハモヨ女ニシアレバ汝除テ夫ハナシ、汝オキテ夫ハナシ」、トヨミ給ヘル如ク、夫ハ後嗣ヲ求ムル為ナレバ、妾アルモ苦シカラズ。繼テ娶ルモサル事ナレド、婦ハ一人ノ夫ヲ守リテ、決シテ他人ニ心ヲウツスベキニ非ズ。サリトテ夫モ恣ニ事ヲ行ヒ、妻ニ傲リテ宜シトイ

フニ非ズ。ヨク義理ヲ以テコレニ遇シ、アヤマクテ過バ教ヘ論シ
モシテ、恩愛ノ情ヲ尽スベキナリ。婦ハヨク夫ヲ敬ヒテ、
其命ニ背クコトナク、又、子ハ母ニ似ル物ナレバ、己レ
正シクシテ、子孫ヲ能ク養ヒ立ツベシ。大伴宿禰家持卿
ノ越中守タリシ時、史生ニ尾張、少昨ト云人、サブル子
トイフ女ニ惑ヒシカバ、歌ヨミテ諭サレタル其一首ニ
「クレナキハウツロフモノゾフルバミ穢ノ馴オレニシキヌニ豈シカ
メヤモ」トヨミ、又、カノ律ニ七出ヲ犯サヌ妻ヲ去ル
モノハ徒罪一年半、マタ妻アリテ、更ニ娶ルモノハ徒一
年ナドイフ事ドモ引レタリ。七出トハ不孝、淫、妒、多
言、悪疾、無子、窃盜ナリ。
婦人ハモトヨリ「天雲ノヨリアヒトホクアハズトモアダ
シ手枕ワレハマカメヤ」、「カニカクニ物ハオモハズ朝露
ノワガ身ヒトツハ君ガマニマニ」ナドイフ歌ノ意ノ如ク、
貞節ヲ守ランコト、イフモ更ナリ。
仁徳天皇宮人桑田玖賀姫ヲ寵セントオボセドモ、皇后ノ
御妒ヲ憚リ給ヒ、コレヲ播磨国造速待ニ賜ヒシカハ、速
待、玖賀姫ノ家ニ行クニ、姫ハウヘナハズ、妾ハ寡ニテ
終ルベシ、君ノ妻トハナラジト云ヘリ。天皇速待ノ志ヲ

遂シメントオボシテ、玖賀姫ヲ速待ニ添テ桑田ヘ送り遣
ハスニ、姫ハ途中ニテ病シテ死タリケリ。日本紀

香岐島人、直玉主女十五ニシテ夫ヲ失ヒ、自誓テ改嫁ヲ
セザルコト三十余年、夫墓ニ仕フルコト平生ノ如シ。宝
龜三年十二月、勅シテ爵ヲ賜ヒ、田租ヲ免ゼラル。続紀

豊前国ニ難波部首子刀自女トイフ女アリ。年十八ニテ下
毛野郡擬大領、蕨野勝宮守ニ嫁シ、廿年ヲ経テ宮守死セ
リ。子刀自女空室ヲ守ルコト十年、人コレヲ婚セントイ
ヘドモ聞カズ。亡夫ノ衣ヲ牀上ニ置キテ朝夕見ルゴトニ
哀シミテ止マズ、ウマキテ甘珍ヲ得レバ、必ズ亡靈ニ備フ。依
テ天長四年正月ニ其戸ノ課役田租ヲ免ジ、門閭ニ表シテ
節操ヲアラハ旌サレタリ。日本
逸史

筑前国人、難波部安良売ハ十六歳ニテ宗像郡大領外正七
位上宗像朝臣秋足ノ妻トナリ、秋足死シテ後、十五年ノ
間、聘セントスルモノアレドモ死ヲ誓テ從ハズ。又、父
母ニ孝アリテ、常ニ塚堂ヲ拜シ、朝夕哀ヲ尽セリ。是ニ
ヨリテ天長五年三月、位ヲ授ケ、田租ヲ免ゼラレタリ。

同上

甲斐国山梨郡ノ人、伴直富成女十五ニテ三枝直平麻呂ニ

嫁シ、一男一女ヲ生メリ。承和四年平麻呂死セリ。ソノ後、貞ヲ守リテ改メズ、年四十四ニ至ルマデ哀ミテヤマズ。常ニ肉食ヲ断チ、靈床ヲ敬拜シテ、存ル人ニ仕ルガ如シ。同十七年五月ニ田租ヲ免ジテ門閭ニ旌標セラル。

紀後

此外、国史ニ見エタル節婦多シ。其名ヲ大凡記スベシ。

石見国人、額田部蘇提売^{孝謙天、皇御代}、信濃国人、他田舍人千代

女^上、土佐国人、物部鏡造家主ノ妻、物部文連全敷女^{平城天皇}

女^上、下野国人、芳賀少領下野公豊繼ノ妻、吉彌候部道足

女^{皇御代}、同国人、大初位上輕部豊益ガ妻、吉成女^{淳和天、皇御代}、

常陸国人、新治真軍ガ妻、文部子氏女^上、伊予国人、風

早直益吉女^上、甲斐国人、小長谷直淨足ガ妻、上村主

万女^上、コレ等イヅレモ朝廷ノ御賞典ヲ蒙リシ人々ニテ、

国史ニ載ラレタリ。

有ル婦人、夫死シテ未ダ若ケレバ、其父母改メテ嫁セン

ト云フニ、女従ハズ。ソノ家ニ巢ヲ作レル燕ノ雄ヲ殺シ、

其雌ノ首ニ赤キ糸ヲツケテ放チタルニ、ソノ翌年、カノ

雌燕ノミ独リ来リシカハ、女見テ、「カゾイロハアハレ

ト見ナンツバメスラフタリハ人ニチギラヌモノヲ」ト詠

シカハ、父母モ感ジテ改嫁ノ事ヲヤメタリ。^{今昔物語}

万葉ニ、「吾背子ハ物ナオモホシ事シアラバ火ニモ水ニ

モ吾ナケナクニ」ト安陪女郎ヨメル歌アリ。日本武尊ノ

妃、弟橘姫命ハ穂積忍山宿禰ノ女ナリ。尊東征ノ御時、

御供ニアリシガ、相模ノ海中ニテ暴風起リ、御舟覆ラ

ントセシカハ、橘姫申スヤウ、コハ必ズ海神ノ心ナルベ

シ、妾王ニ代リテ海中ニ入ラント云ヒヲハリ、立ツ浪ヲ

ヒラキテ海底ニ跳入レリ。是ニヨリテ浪風治マリテ、船

ハ恙ナク岸ニ着ケリ。^{日本紀古事記}

山城国蹴揚トイフ所ニ、七兵衛トイフ樵夫アリ。一日山

ニ行テ帰ルコト、甚遅カリシカハ、其妻尋ネ行タルニ、

採レル木ノミアリテ人ハ見エズ。怪ミテ傍ヲ見レバ、大

ナル蟒居タレバ、是ガ吞タルヲ知り、己レモワザト彼ニ

吞レ、持居タル鎌ニテ腹ヲ割テ、夫ヲ救ヒ出シタルニ、

夫婦トモ毛髮ハ尽クヌケタレド、命ハツ、ガナカリシト

ゾ。又、丹波国舟井郡ノ樵夫久兵衛、享保三年十一月廿

八日ノ事ナリシカ、野猪ニ喰レントセシヲ、其妻、猪ノ

首ニ抱キ付テ人ヲ呼ビ、久兵衛ヲ助ケシトゾ。^{右事騎人伝}

上ニモ云フ如ク、婦人ハ柔和温順ヲ主トハスレド、時ニ

ヨリテハ志ヲ勵シ、事ヲ行ヒテ、大二夫ノ為メ助ト成リ
シ事アリ。是ハ事ノ變ナレド、心得置ベシ。

舒明天皇ノ御代、蝦夷叛キ奉リケレバ、上毛野君形名ヲ
將軍トシテ討シメ給フニ、敗走シテ軍兵悉ク逃去リヌ。

依テ形名セン方ナク、日暮ニ及デ垣ヲ踰テ逃出ントス。

形名ノ妻コレヲ歎キ、モシ逃去ラバ、反テ蝦夷ニ殺サル

ベシ、汝ノ祖ハ海外マデ渡リテ武名ヲ流シタルニ、今先

祖ノ名ヲ屈シテ、後世ニ笑ハレンハ口惜キ事ナリト、強

テ酒ヲ吞セテ酔シメ、親ミソカヲ夫ノ劍ヲ佩キ、十張ノ弓ヲ

張テ數十人ノ女ヲシテ其弦ツルヲ鳴サシム。蝦夷、此サマヲ

見テ、軍兵猶多シトオモヒテ引退キタリ。コ、ニ於テ散

卒、又集リテ蝦夷ヲ討チ敗リケルトゾ。日本紀

女ノ妒セザルハ百拙ヲオホフト云リ。在原朝臣業平、

紀ノ有常ノ女ニアヒケルガ、河内国高安タカヤスノ女ニ通ヒテ

度々行ケレド、有常ノ女ハ更ニ妒メルケシキモナク出シ

ヤリヌ。依テ大二怪ミテ別心有ラント、アル夜、河内ニ

ユク面モチニテ、前栽ニカクレ居テ見レバ、月ノイト清

キニ琴カキナラシテ、「風フケバオキツ白波立田山夜半

ニヤ君ガ独リコユラン」トヨミテ打歎クニゾ、業平、大

ニ感ジテ河内ヘハユカズナリヌ。古今集
伊勢物語

又、丹波国人、其國ノ女ヲ妻トシタル後ニ、京ナル女ヲ

愛シ、家ヲ並ベテスミ居タルガ、秋ノ夜、鹿ノ鳴ケルヲ

聞テ、男今ノ妻ニ何ト聞給フト問フト問ヘバ、煎物ニテ

モ、甘シ焼物ニテモ、美ウツクキ奴ヌナリトイフ。又、本ノ妻ニ

問フト、「ワレモシカ泣テゾ人ニ恋ラレシ今コソヨソニ

声ヲノミケケ」トヨミケレバ、男今ノ妻ヲ京ヘ送り返シ

テ、本ノ妻ト住ミケリ。今昔物語
新古今集

右二人ハ、イト風雅ミヤビタルワザニテ、凡庸ノ人ノ学ビ難キ

事ナレド、此心バヘハ忘ル、コト無ク、能、誠ヲ尽シテ

怨ウラミマズ、妒ウラヤマサレバ、夫ノ心ヲ取直スコト有ベシ。ヨク

思ヒメグラスベキ也。

以上夫婦ノ道

兄弟ハ同ジ父母ノ生ム所ナレバ、其親ミ、実ニ一方ナラ

ズ。故ニ兄ハ弟ヲ愛シテ教ヘ、弟ハ兄ヲ敬シテ順フベキ

也。和氣清麻呂卿ノ姉広虫ハ孝謙天皇ニ仕ヘ奉リ、天皇

御飾ヲ下シ給ヘル時、己レモ尼ト成テ法均ト名ク。此人

姉弟イト親シク、其財ヲ同ジクセリトテ、当時ノ人ニ賞

ラレタリ。又、宝字八年惠美押勝謀反ノ時、死罪ニ当ル者三百七十五人有シヲ、法均諫ヲ献リシニ依テ、死罪ヲユルシ流刑ニ処セラレタリ。ソノ後、飢饉ニテ民間子ヲ棄ルモノ多カリケレバ、之ヲ取テ養ナヒ、八十三児ヲ得タリ。天皇アルトキ仰ケルハ、侍臣イヅレモ毀譽紛紜スレドモ、法均ガ他人ノ事ヲ語レルヲ聞タルコトナシト詔ヘリトゾ。日本後紀

垂仁天皇ノ皇后狭穗姫命、其兄狭穗彦命謀反シテ誅セラル、時、兄ノ城中ニ逃入り、其生メル皇子蒼津別命ヲ御門ニ送り還シ奉リ、天皇ノ種々ニ助ケントオボシテ、召シ給フヲ聽入レ給ハズ。遂ニ城中ニテ、兄ト共ニ焼死シ給ヘリ。日本紀コハ天皇ノ御為ニ取リテハ、サシモ忠ナルニアラネド、兄ヲ憶ヘル志ハイト深カリケル也。

応神天皇其幼子、宇治、若郎子ヲ太子ニ立給ヒシカ、天皇崩御ノ後、若郎子、其御兄大雀命ニ譲リテ曰ク、我ハ弟ニシテ不賢天位ヲ継ベカラス、王宜シク即キ給ヘトノリ給ヘバ、大雀命ハ先皇ノ御定ニ背クベカラズトテ堅ク辞ミ給ヒ、互ニ相譲リテ、三年ガ程空位ニテアリケレバ、貢キ奉ル者モソノ適ク所ヲ知ラズ、若郎子命民ヲ

勞スルコトヲ慨キテ御ウセ給ヒケレバ、大雀命御位ニ即キ給ヘリ。コレ仁徳天皇ニマシマス也。日本紀

又、市辺押齒皇子ノ御子億計命、弘計命難ヲ避ケテ丹波国ニマシケルガ、清寧天皇ノ御代来日部小楯トイフ人、ソノ国ヘ往ケル時、弘計命舞給ヒテ、其詞ニ皇胤ノ由ヲ述ベ給ヒケル故、都ヘ上セ奉リテ、億計命、皇太子ニ立セ給ヘリ。清寧天皇崩シ給ヒテ後、太子其御弟ニ、

我等ガ迎ヘラレタルハ皆弟王ノ力ナリトテ、譲リ給フニ、弘計王ハ弟ニシテ、兄ニ先ダツベカラズ。且先皇ノ命也トテ、受給ハズ。互ニ譲リ給ヒシカ、弘計命遂ニ御位ニツキ給ヒ、其後、億計命モ立給ヘリ。弘計命ハ顯宗天皇ナリ。億計命ハ仁賢天皇ナリ。同上

仁徳天皇ノ御代、的臣祖、口持臣ガ妹、国依姫古事記ニハ九トアリ皇后磐之姫ニ仕ヘ奉レリ。天皇ヨリ口持臣ヲ御使ニテ、皇后ノ御許ヘ遣シケル。時皇后ハ御怒リ給フ事アリテ御答ヘシ給ハズ。口持臣、日夜御庭ヲ去ラズ、大雨フリテ水潦ソノ着タル青摺衣ニツケシ紅紐ヲヒタシテ青色変シテ紅ニナリヌ。国依姫コレヲ見テ、打泣ツ、「山城ノ筒城ノ宮ニモノマラス我兄ヲ見レバ涙クマシモ」ト

ヨミケレバ、皇后ソノ由ヲ問給フ。国依姫答ヘテ、コレハ吾兄ナリ、雨ニ沾レドモ避ラズ、猶申サントスル故ニ、哀シクテ泣ナリト申セリ。古事記
日本紀

堀川院天皇ノ御時、家綱、行綱トテ兄弟アリ。無双ノ猿樂ナリ。アル年、内侍所御神樂ニ、家綱袴ヲ引揚テ云々ノ態ヲナサント思ヒテ、其弟ニ議スルニ、公ノ御前ニテ便ナカラント云ニヨリテ、異ナル術モナサズ、其次ニ行綱出テ袴ヲ股マデカキアケテ、寒ゲナル声シテ、ヨリ／＼ニ夜ノフケテサリ／＼ニ、寒キニフリチウフグリヲアリチフアラントテ、庭火ノマハリヲ十二三度走リテ入リヌ。家綱謀ラレタルヲ憤リシカト、兄弟ノ中違フベカラズトテ、始ニ替ラズ親ミケリ。宇通
拾遺

以上兄弟之道

朋友ハ専ラ信ヲ厚クシ、互ニ相親ミ、相助ケテ事業ヲナスベキ也。サテ責善ハ朋友ノ道ト云ヒテ、互ニ切磋琢磨シテ、過チアラバ諫メ正スベシ。然レドモ、人心如^レ面ト云フゴトク、人ハソレト^レニ心異ナルモノナレバ、己ガ思フマ、ヲ而已云ヒテハ、和ヲ失フベケレバ、和親

ノ意ヲ本トシ、其人ノ為ヲ思フ誠ヲ以テ交ルベキナリ。是ハ同僚同志ノ事ナレド、天下ヲ一家トシ、四海ヲ兄弟トスル開化ノ御代ハ、国内ノ人ハモトヨリ、知ルモ知ラヌモ実ニ兄弟ナリ。交際ノ情厚カラズハ有ル可カラズ。少彦名神ノ大國主神ノ御許ニ來リ給ヒシ時、其御名ヲ告給ハザリシカハ、天神ニ申シ上給フニ、産靈神キコシ召テ、コハ吾御子也、汝、葦原醜男神^{大國主}ニ兄弟ト成リテ、其國ヲ造リ堅メヨト、ノリ給ヘリ。是ヨリ二神心ヲ共ニシ、力ヲ合セテ天下ヲ經營シ、國ノ為、民ノ為、大功ヲナシ給ヘリ。古事記 然レバ、親シキ兄弟ナラズトモ、朋友相共ニ同心協力シテ、功業ヲ立ベキコトナルベシ。味鋌高彥根^命ハ天若日子ト交リ深シ。天若日子、天神ノ勅ニ叛キテ死シケル時、高彥根ノ命其喪ヲ吊ヒ給ヘリ。其御言ニ、我ハ愛シキ友ナレバコソ吊ヒ來ツレ、ト詔ヒシ事アリ。古事記 スベテ人ノ富貴ナル時ニハ親ミ、貧賤ニ至レバ踈ムモノアリ。若日子ハ逆罪アレドモ、昔日ノ交際アレバ、喪ヲ吊ヒ給ヒシ御志カシコケレド、イト貴シ。紀^{有常}ハ始ハ三代ノ帝ニ仕ヘ奉リテ、時ニアヒ、ケレド、後ニハ家衰ヘ、貧シク成シ、故ニソノ妻世ヲイトヒ

尼ニナリテ家ヲ立出ケルニ、贈ルベキ物モナケレバ、セ
ン方ナク、其由ヲシルシ、今ハトテ罷ルヲ聊ナル事モエ
セデ、ツカハス事ト書キテ、「手ヲ折テヘニケル年ヲカ
ゾフレバ十トイヒツ、四ツハヘニケリ」トヨミテ、在原
業平朝臣ニオクリヌ。業平イトアハレト思ヒテ、夜ノ物
マデ贈リツカハストテ、「年ダニモ十トテ四ツハ経ニケ
ルライクタビ君ヲタノミ来ヌラン」トイフ歌ヲソヘテヤ
リケレバ、有常、大ニ喜ビテ、「コレヤコノ天ノ羽衣ウ
ベシコソ君ガミケシトタテマツリケレ」、「秋ヤ来ル露ヤ
マガフト思フマデアアルハ涙ノフルニゾアリケル」ト詠ミ
ケリ。伊勢
物語

万葉ノ歌ニ、「死モ生モ同ジ心トムスビテシ友ヤタガハ
ン我モヨリナン」、「ナニセンニタカヒハヲランイナモウ
モ友ノナミ／＼吾モヨリナン」、「ニホ鳥ノオキナガ川ハ
タエヌトモ君ニ語ラン言ツキメヤモ」ナドアル歌ドモノ
心ヲワスレズ、朋友ニ信ヲ尽スベキモノ也。

以上朋友之道

皇上奉戴朝旨遵守

吾天皇ハ、天地四海ヲ照臨マシマス天津日大御神ノ御子
孫ナレバ、日御子ト称シ奉リ、マタ現人神トモ申セリ。
コレハ人ト現ハレタル神ト申スコト也。既ニ前ノ君臣ノ
道ノ条ニモ記セル如ク、天照大御神ノ勅ニ、葦原水穗国
ハ吾子孫ノ世々知食スベキ国也ト詔ヒテ、其御孫瓊々杵
尊ヲ天降シ給ヘルハ、即チ、コノ天下ノ万民ヲ愛憐シ給
フ大御心ヨリ、コレヲ治メ給フ。君主ナクテハ、強キハ
弱ヲソコナヒ、愚ナルハ智アル者ニ押し倒サレテ、天下
一日モ安穩ナルマジキ事ヲオボシ召シ、其大君ヲ定メ給
ヘル也。然レバ、民タルモノハ、常ニ此由ヲ思ヒテ、皇
上ヲ尊ミ、敬ヒ奉ラズハアルベカラズ。総テ外国ニテモ、
君ハ臣ノ天ナリトモ、天子ハ民ノ父母也トモイヘド、ソ
ハ唯一、時智徳アルモノ、万人ノ上ニ立テ治ムルマデナ
レバ、君タル徳ナキトキハ、忽チ、ソノ位ヲ失フニ至ル。
我皇上ハ、天神ノ御子ニシテ、天神ノ勅ヲ以テ、神代ノ
昔ヨリ定マレル大君ニマシマセバ、大御神ノ神勅ノ如ク、
天壤無窮ニ天下ヲ知食ス御事ニテ、外国ノ君トハ、同日
ノ談ニ非ズ。古ヨリ逆意ヲ懷クモノ有トイヘドモ、一人
モ志ヲ遂タルハナク、若聊モ勅命ヲソムク者ハ、朝敵ト

イヒテ、人皆悪マザルモノナシ。万葉集ノ歌ニモ、「大君ハ神ニシマセバ」トモ、「山川モヨリテツカフル」トモヨミ、任那新羅ノ表文ニモ、天ニ神アリ、地ニ天皇アリ。此ニ神ヲ除テハ、何亦畏キモノアラシヤト申セルコト、御紀ニ見エタリ。上ニモ云ヘル如ク、天神ノ勅ノマニク、天ニ代リテ民ヲ治メ給フ大君ニマシマスナレバ、

ソノ仰出サル、朝旨ハ、即ハチ天神ノ命ナリ。人ハ天神ノ靈ニ因テ生ズルコトナレバ、如何ゾ、天神ノ命ニ背クコトヲ得ンヤ。然レバ、皇上ヲ奉載シ、朝旨ヲ遵守スル事、人ノ天神ニ従フ所以ナリ。外国ニハ神ヲ大君トシ、人君ヲ小君トシテ、大君ノ命ニ従ハズ、小君ニハソムクトモ苦シカラザル如ク云フモアル由ナレド、ソハ一時、民ヲ治ル者コソ然ラメ、我皇上ヲバ、決シテソレト同等ニ思フベキ事ニアラズ、慎シムベシ。

雄略天皇ノ御時、小子部連栖輦トイフ人ニ、雷ヲ捕ヘヨト命ジ給フニ、依テ栖輦長リ、馬ニ乘リテ、天皇ノ請給フト呼ハリテ、雷ヲ追カケシカ、急ニ走リテ雷神トイヘドモ、何ゾ天皇ノ請ヲ聞ザラントイヘバ、豊浦寺ト飯岡ノ間ニ雷落タリ。即チ捕ヘテ奉レルヲ、天皇モトノ処ヘ

還シ給ヘリ。故ニ其処ヲ雷岡ト名ケタリト云伝フ。靈異記
コノ事奇怪ナル物語ナレド、古キ書ニ見エタレバ、挙ゲタリ。

推古天皇二十六年、河辺^ノ臣ヲ安芸国ニ遣ハシテ船ノ材ヲ伐ラシメ給フニ、河辺^ノ臣良材ヲ見テ伐ラントスルニ、土人ノコハ霹靂ノ木ナリト云ヘハ、雷神ナリトモ皇命ニ違ハンヤトテ、幣帛ヲ進リ。サテ伐ラントスルニ、大ニ雷鳴セリ。河辺^ノ臣劍、頭ヲ握テ雷神^ノ人夫ヲ犯スコト勿レ、吾ヲ撃ベシトイフ。十余度霹靂シタレドモ、河辺^ノ臣ヲ犯シ得ズ、遂ニ木ヲ伐ルコトヲ得タリ。日本紀

延喜天皇神泉苑ニ行幸アリシ時、池ノ辺ニ白鷺ノ立ルヲ、侍臣ニ命シテ捕ヘシメ給フ。其時、鷺飛去ラントセシヲ、勅命也去ルコト勿レト云ヘバ、即チ留リテ捕ヘラレヌ。

天皇コレヲ賞シテ五位ヲ授ケ給ヘリ。コレ五位鷺ノ始ナリ。是等ハカノ、「スメロギハ神ニシマセバ天雲ノ雷ノウヘニイホリスルカモ」、マタ、「ハフ虫モ大君ニマツラフ」、杯イフ歌ニ叶ヘル実事ナリ。

允恭天皇四十二年、天皇淡路ニ幸シ給ヒシ時、嶋ニ坐ス神、赤石^ノ海中ニ真珠アレバ、取テ獻ルベシト告給フ。

海士^{アマ}ニ命ジテ捕ラシメ給フニ、皆獲ルコト能ハズ。中ニ阿波国長邑男狹磯^{ツヤシ}トイフ者、海底ニ入テ見ルニ、大蜺^{アハヒ}アリ、必ズ其中ニ真珠アラントテ、繩ヲ腰ニ懸テ海中ニ入ル。良久クシテ、蜺ヲ抱テ出タリ。然レドモ、氣息已ニ絶ヌ。天皇是ヲ愍ミ給ヒ、勅シテ厚ク葬ラシメ給ヘリ。
日本紀

後醍醐天皇ノ正中二年、天皇北条高時ヲ滅サント謀リ給ヒシ事、鎌倉ニ聞エシニ、依テ高時御謀ニ預レル中納言資朝、藏人頭俊基ヲ鎌倉ニ送ラシム。天皇患ヒ給ヒテ、

御書ヲ鎌倉ニ遣シケルニ、高時コレヲ受ントス。二階堂道蘊、諫ムレドモ聞カズ。遂ニ利行トイフ者ヲシテ、之ヲ誦シム。利行目眩シ、鼻衄シテ誦ムコト能ハズ。喉下、忽ニ惡瘡ヲ生ジテ、後血ヲ吐テ死セリ。記太平

後花園院天皇嘉吉二年九月廿三日夜、南朝ノ旧臣ノ裔僞帝ヲ立、神靈ヲ盜マントシ、禁中ヲ襲フ。天皇会群臣ト宴シ給ヒシガ、群臣皆驚駭ギテ、拒ギ戦フコト能ハズ。

賊兵攻入り、火ヲ放チ、長刀ヲ揮フテ天皇ニ僞逼リ奉ルニ、忽然トシテ目眩テ斃ル。賊コレヲ視テ、畏レテ近ヅクコト能ハズ。其間ニ、天皇ハ逃レ給ヘリ。續神皇正統記コレラ

ハ現人神ト坐ス天皇ノ御稜威ノ盛ナリシ事迹ナリ。

神武天皇東征シ給ヒシ時、宇陀ニ到リマセルニ、兄弟^{オトウカシ}弟^{オトウカシ}弟^{オトウカシ}トイフ二人アリ。其兄^{オトウカシ}弟^{オトウカシ}ハ權ニ新宮ヲ作りテ、殿

内ニ機ヲ施シテ、饗ヲ設ケテ天皇ヲ害シ奉ラントス。弟^{オトウカシ}弟^{オトウカシ}ハ之ヲ天皇ニ告ス。天皇、即チ道臣命ヲ遣シテ、誅サシメ給ヘリ。日本紀弟^{オトウカシ}弟^{オトウカシ}、ソノ兄ノ惡事ヲ奏シタルハ、如何ナルニ似タレドモ、天皇ニ叛キ奉レル逆賊ナレバ、皇

上ノ御為ニハ、私事ヲ顧ルベキニアラザル故ニ、止コトヲ得ザル臣子ノ道ナリ。

景行天皇五十一年正月、群臣ヲ召シテ、数日宴シ給ヒケル時、皇子稚足彦尊^{天皇成務}ト武内宿禰ハ宴庭ニマキラザリケレバ、天皇怪シミテ、其故因ヲ問ヒ給フニ、其日ハ群卿皆戲遊ニ情ヲ專ニシテ、国家ヲ存^{オモ}ハジ。若シ狂生アリテ、其隙ヲ伺ハン事ヲ恐レテ、門下ニ侍リテ、非常ニ備ヘタリト奏シタマヘリ。日本紀

高倉天皇治承元年、平清盛、後白川法皇ヲ鳥羽ニ幽セント欲ス。重盛落涙シテ諫諍シテ曰ク、天下、皇恩ヨリ尊キハナシ、且今先祖無例ノ大臣ニ位シ、国郡半バ一家ノ所領タリ。コレ希代ノ朝恩ナラズヤ。然ルニ、今此恩ヲ

忘レテ、法皇ヲ幽センハ無道ナリ。重盛莫大ノ皇恩ヲ蒙レバ、争カ、王命ヲ以テ、父命ニ代ルコトヲ得ン。若シ承引ナクバ、重盛ガ首ヲ刎給ヘト云ヘバ、其事止ミタリ。

源平盛衰記

後醍醐天皇建武三年十二月、刑部大輔三条景繁、勾当内侍ニ由テ奏シケラク、新田義貞ヲ始メ、勤王ノ士、所々ニテ賊軍ヲ敗リ、諸国ニ義兵ヲ起スモノモ多ケレバ、間ニ乗ジテ大和地方ニ行幸シ、詔ヲ四方ニ下シテ義兵ヲ募リ、賊臣尊氏ヲ討チ給フベシト奏シケレバ、天皇悦ビ給ヒ、女装シテ南遷シ給ヘリ。太平記

同天皇隱岐ニ遷リイデマシク、備前ヲ過給フ時ニ、其国ノ住人、児島備後三郎高德トイフ人、途中テノ奪ヒ奉ラント欲スレドモ、濟ラザリシカバ、其夜、雨ニ乗ジテ潜ニ行在ニ到リテ、桜樹ヲ削リ白クシテ、天勿レ空ニ勾ク踐レ、時非レ無ニ茫ニ蠡トトイフ二句ヲ書キタレバ、天皇コレヲ見給ヒ、勤王ノ士アルコトヲ知シメシテ、心ニ喜ビ給ヘリ。同上

楠氏父子ノ後醍醐天皇ヲ奉シテ、身ヲ棄テ力ヲ尽シ、事イト長ク、且ツ世人ノ知ルトコロナレバ省キヌ。

承久ノ乱ニ、官軍敗レテ御味方、或ハ殺サレ、或ハ拘トハレタル中ニ、清水寺ノ鏡月坊モ捕ハレテ鎌倉ヘ降サレ、既ニ誅サレントスル時、腰折一首ヨミタリトテ、北条ニ見セタリ。其歌ニ「勅ナレバ身ヲバステ、キモノ、フノ八十宇治川ノ瀬ニハタ、ネド」、泰時、コレニ感ジテ赦セリ。承久記此鏡月ハ、法師ナガラ身ヲ棄テ、官軍ニ属シタル志トイヒ、歌道ニモ通ジタレバ、サシモ無道ノ北条ヲモ感ゼシメシ也。

殿法印良忠ハ、後醍醐天皇ヲ奪ヒ奉ラントセシニ依リテ六波羅ニ捕ラレ、北条仲時糺問シテ、一天ノ君モ御志ヲ遂給フコト叶ハヌニ、御身ナドガ謀計粗忽ナリ、武敵ノ至リ、重科ナラビナシ、計ノ次第、悉ク述ラレト云ニ、良忠答ヘテ、普天ノ下、王土ニ非ズトイフコトナシ、率土ノ濱王臣ニ非ストイフコトナシ、誰カ先帝ノ宸襟ヲ歎キ奉ラザラン、無道ヲ誅セン為ニ隱謀ヲ企ツルコト、更ニ粗忽ノ義ニアラズト答ヘタリ。太平記此人モ世ヲステ、家ヲ出タル身ニシテ、カク勤王ニ志シ、聊モ北條ガ威權ニ屈セズ、潔ク返答セシハ感ズルニ堪タリ。況ジテ臣下タラン者ナドハ、皇朝ノ御為、身ヲ致シ、力ヲ尽サデハ、

有ルベカラズ。

明教事実 下巻終

明教事実ヲ刻本トスル由縁

コレノ明教事実ヨ、アガ族ドモノミヅカラノ説教ノ種子
トモ、セマホシク思ヒテ編メルニテ、モトヨリ、文章ノ
拙キハ更ナリ、事ノ心サへ、タシカナラヌモ多カルベク、
人ニ示スベキ物ニハ非ズサルヲ、梅津大講義ノ見テ、
初々シキ教導職ノ人タチニ、便ヨカメレバトテ活字ノス
リ本トナシタリシヲ、彼方此方ヨリ、求ムル人多ニナ
リヌレバ、正シク板ニエリテヨト、人々ノネモゴロニ云
ヒス、ムルニ、イナミ難クテ、桜木ニ寿スル事トハナリ
ヌ故、コノ由、一言カキソフルニナン。

明治七年九月ノ初ツカタ

オホイ七ノクラ年久保季茲識ス